

cyu-mail/gallery

中さんの絵本

鈴木 中画・文
神奈川県立湘南高校サッカー部OB編集



中 cyu-mail/gallery
さんの
絵本
鈴木 中画・文



神奈川県立湘南高校サッカー部 OB 編集

喜びの寿を記念して

昭和36年（1961）、鈴木中は

神奈川県立湘南高校体育教諭として赴任。

同時にサッカー部指導者としてグラウンドに立つ。

いきなり県予選で優勝し国体へ出場したのを皮切りに、

以後の多岐にわたる実績については本編をご参照。

平成元年（1989）、昭和天皇崩御直後の

正月の全国大会に23年ぶりに出場を果たしたのだが、

それを節目とするかのように湘南高校を退いた。

昭和10年（1935）生まれである。

したがって平成24年（2012）で77歳を迎える。

喜の字を草書体で書くと「七十七」に見えるところから

この歳は喜寿とされる。

大病を契機として鈴木中は素人画師となった。

海辺を、寺社を、都市を、季節を精力的に描きはじめた。

かたわら、湘南サッカー・ホームページに文章を寄せる。

こちらはもっぱらサッカー論である。

画と文は本人もおどろくほど降り積もった。

どうですか、「喜びの寿」の記念に一冊にまとめてみては。

はんぶん軽口、はんぶん本気で教え子がそそのかした。

ばかいえ、そんなもん、と言い捨てたのだが

いつのまにか実現の運びとなった。そこに至る心境については

次ページ「私の湘南高校半世紀」にゆずるが、

いざとなったらまことに真剣な本づくりを推し進めた。

そして、計画どおり「喜びの寿」に

間に合っただけでよかったわけである。

趣向を凝らした編集とは程遠いが、

やはりここにはひとりの人間の歳月が確実に籠っている。

サッカーという生き方が匂っている。

「中さんの絵本」編集部（湘南サッカー部OB）

*表紙・扉の絵は、鈴木中作品「湘南高校」



2010年 ヨット船上から



2007年 横浜市内でのスケッチ



日本協会功労賞



東京オリンピックプログラム表紙

私の湘南高校半世紀（サッカー人生）

1961年昭和36年5月に京都から突然の赴任だった。当時の名物校長香川幹一氏に呼ばれ、初めて見る湘南の地にやってきた。その頃まだ藤沢駅前には静かな田舎町という感じで、駅前旅館が2軒（稲毛屋・角若松）だけだったと思う。東海道線沿いでは大船の観音像が新しく出来上がったばかりだと記憶している。あれから2011年で満50年が過ぎた、記念すべき年になった。

湘南の教員生活が28年、その間の事は「湘南サッカー実戦譜」1989年9月に発行された、記念誌に多くの卒業生から激励文を頂いた。あれからでも既に20数年になる。管理職任田高校教頭・平安高校・海老名高校校長を経て退職、神奈川県サッカー協会理事長・会長・名誉会長で現在に至っているが、その間さまざまな形で湘南高校サッカー部とは縁があつて今日まで続いている。

「中メール・続中メール・続々中メール」を124回、浅倉君の協力でOB会のHPに掲載して10年が過ぎた。また趣味で描き出した「水彩画」も約10年、正式に記録した作品も約300点に達した。卒業生のHP（湘南の画伯たち）に乗せた作品も200点ほどになった。色々の節目を迎え、いよいよ「喜寿」77歳になる。そこで何らかの形でひと区切りをまとめたといえるようになった。昨年ある会合でサッカーの講演を頼まれ、自分の「水彩画」を

スクリーンに出しながらサッカーの話をしたところ、非常に好評だったのでこれに味をしめ「中メール」「水彩画」を一つにする手法を使って「自分史」的なものを一冊の本にまとめることにした。プロの画家でもなく、プロのもの書きでもない私が、思いつきだけでやるのは無謀というもので、まして何も判らぬ老人が一人で粹がつかなくても無理な話だと解かつてはいるが。

この話がある酒席でOBに相談したところ、「書くのは恥ばかりだが、サッカーの指導は日本一を自認するプロだと思ってる。」という事で実現に動き出した。内容はあくまでも77年の節目を迎えた「サッカーのプロの指導者」がまとめたものであり。それは古い理論かもしれないが、誰よりも日本の教育の原点にたち、日夜苦勞をしながら実践を通しての経験から生まれた、味のある内容にしたいと思いつながら書いたものなのでご理解願いたい。

大きく分けると「サッカーの技術指導に関すること」「ワールドカップに関すること」「日本サッカーの批判」「日本サッカー協会の組織」「アマチュアのサッカー・大学・社会人・高校・女子・少年」「湘南高校現役者の状況」「湘南高校スベイン遠征報告」「海外のサッカー事情」「湘南高校サッカー部OBの活躍」「私の生き方」「健康について」「老後の問題」「その他」「中メール」120回の中から、何回分かを選出、作品約50点、参考資料数点を掲載した。尚OB諸氏からの原稿を数人にお願ひし快く引き受けていただいた。最初に御礼を申し述べたい。

鈴木 中

蹴球を語り、水彩を描く

喜びの寿を記念して……………2
私の湘南高校半世紀(サッカー人生)……………4
サッカー基本のキ……………10
グリーンハウス物語……………12
描く楽しさ……………14
書く事・描く事の難しさ……………16
50回の区切り……………18
2006年の抱負……………22
オシムのサッカー……………24
本当にサッカーは面白い……………32
還暦の祝い……………34
脳の活性化……………36

中賛記、中祝記かずかず

鈴木中先生と湘南高校に捧げる賛歌 倉岡誠親……………38
喜寿に寄せて 宇野 勝……………40
喜寿のお祝いに際して 牧村英樹……………41
半世紀の付き合い 小泉親昂……………41
之を楽しむ者にしかず 飯田志農夫……………42
中さんへの手紙 山田仁夫……………43
横浜港に吹く風 植松二郎……………44
祝喜寿 関口 真……………45
45回生還暦を祝う会を開催 浅倉 泰……………46
鈴木先生、喜寿、おめでとございます 湯浅健二……………47
中さん・カリスマ先生の足練口管? 鈴木啓介……………48
中先生の水彩画を見ながら 細川周平……………49
中さんの掌の中 関 佳史……………49
湘南サッカーと仲間 沢田ミツル……………49
我が湘南サッカー部雑感 水戸将史……………50
喜寿にあたって 八木啓太……………50
初代女子マネージャーとして 小泉治子……………51
人に囲まれて生きることのシアワセ 本島玲子……………52
喜寿おめでとございます 宮井真純……………52

これが、僕らの、夢だった 篠塚 毅……………53
スペイン遠征で湘南生が得るもの 篠塚貴志……………54
親子で体験湘南サッカー部 榊原和久……………55
スペイン遠征の思い出 榊原和洋……………57
俊邦のカミサンから 故鈴木俊邦令夫人……………57
御礼 故山口晴夫令夫人……………59
伝えること、継続していくこと 若木 均……………60
国立を目指す! 田村直也……………61
文武両道の象徴 鈴木中先生への感謝と湘南サッカーへの期待 川井 陽一……………61
出合い 小林周太郎……………62
中先生の喜寿に寄せて 藤塚久雄……………63

興に乗り、もつと遠くへ

90周年記念祝賀会……………66
プロとアマの違い……………68
ふたたび90周年について……………70
ワールドカップ雑感……………72
日本サッカーの行方……………74
2010シーズン……………80
今は昔……………82
父鈴木幾雄 落語家柳家小さん師匠……………83
舌切り雀のたわごと……………86
湘南高校健在なり……………88
現役情報……………90
サザンビーチ……………90
「中」兄との関係と感謝の言葉 鈴木 宝(実弟)……………93
安堵、ほっとしております 鈴木渥子(妻)……………92
看板 鈴木 理(長男)……………92

「蹴球道」三村格一……………36
1969年アジアユースサッカー大会メンバーの集い……………56
おわりに……………94
編集後記 相羽克治/鈴木 中……………96



蹴球を語り、水彩を描く

クラマーさんのことや
これからの高校サッカーのことなど



東京駅丸の内口

私の高校時代(都立豊多摩高校)1953年第31回全国大会(西ノ宮)へ出場、ここで壮行会を開き、夜行列車で大阪へ。教育大学時代九州、四国、他数回の合宿へ、天皇杯決勝(広島)大会へ夜行列車で出発・その他思い出多数あり



大船観音

1961年5月、湘南へ初めて顔を出した時東海道線の車窓から見た景色で「観音様」が妙に印象に残っていた。その後眺める事が多かったが、絵を描き出して数年後、何とかあのお顔を描いてみたいと挑戦しているが、難しい。



神奈川県協会で講演・参加者と記念写真

2002・6・20・W杯開催中、デットマル・クラマー氏は体育センターを見学しグリーンハウスにも寄り、大変懐かしがられ、その後県協会の会議室でお話を聞いた。湘南40回生・矢沢君の作品・鎌倉彫を記念に贈呈した。



横浜国際競技場（現日産スタジアム）

2002・日韓共同ワールドカップ決勝会場。この時クラマーさんは77歳。新しい奥様（韓国人）を連れてお二人で観戦に来られた。決勝はドイツ1-2ブラジルの優勝だった。歴史に残る素晴らしいゲームだった。

サッカー基本のキ

(中メールNo.14 2001.11)

私が習ったサッカーの基本はデットマル・クラマー氏のドイツサッカーである。

解りやすいドイツなまりの英語を何回も繰り返し「足首の固定」を強調したサイドキックの指導が思い出される。そのときに習ったものを中心に整理した幾つかを拾い上げて見た。

「攻撃」

○シュートを打った瞬間、ゴールへ詰める。打った選手も、フォロワーの選手もこの習慣を守れ。

○敵のペナルティーエリア内はドリブルで抜こうとすることが有効なプレーである。守る側にPKの恐れあり。

○ボールにどれだけ寄ってシュートを打てるかがその選手の「力」だ。

○ゴロのシュートはCKが一番防ぎにくい。

○味方エンドでのパスは味方選手の足元へ「簡単に」「正確に」がベスト。

○得点までのパスの本数は多くて4〜5本くらいだ。

○相手ゴール前につめる時は、横一線ではいるな。段違いになつてつめて行け。

○パスを貰う時に大切な事は「タメ」を作る事。スペースを生かすために。

○攻めのスピードはゴロのパスが一番速い

○敵のDFを守るゴールへ向いていて、GKとの間のスペースへと後ろからラストパスを入れるのが一番得点しやすい。

○センターリング・CKの弱く浮いた高いボールはカウンターされる事が多い。

○低い位置でDFからトップにくさびのパスがどれだけ通るかが現代のサッカー。

○前方と横にフリーな味方がいればパスは前方を選ぶ。

「守備」

○マークしている敵へパスされた時、第一にパスカットを狙い、駄目な場合は前を向かせない様に、それが駄目ならワンサイドへ追う。

○大きくクリアーできそうな時は、真上でも良い、高く蹴れ。時間を稼げ。

○しっかりとマイボールにするのが守備の最高のプレー。マイボールにするタックルも練習しなければならない。

○守備で、敵の近くについている時は自分の裏へのパスに「ヤマ」をかけ、離れてついている時は敵の足元へのパスを狙う。

○少し位の敵のチャージで倒れるな。なかなか倒れない選手は良い選手だ。

○守備で戻りのランニング方向は味方PKマークだ。

○味方エンドでサイドをかえる長いパスはすごく危険なパスである。

○守備でボールをいつまでもバウンドさせていることが一番危ない。

○敵のセンターリングやシュートに対する守備は空中で足に当てる技術を練習せよ。



グリーンハウス正面

1962年・東京オリンピックの準備でサッカー日本代表が合宿をした時に使用した合宿所である。数々の思い出があるが、古い芝生のグラウンドで湘南高校が冬の選手権大会に優勝をして2回も神奈川県代表になった記憶は忘れがたい。



グリーンハウス南側

こちらの景色は神奈川県国体選抜チームの合宿、湘南高校の夏の合宿の記憶が甦ってくる。二段ベットの4人部屋の宿泊所お粗末な部屋だったが当時は何も不満を言うものも無く気持ちよく宿泊できたと思っている。

グリーンハウス物語

(続々メール4月号 2001.4.1)

今回のテーマが「グリーンハウス物語」となっているが、今年に入り善行雑学大学から、表題の冊子が刊行され私の手元に送られてきた。この冊子についての説明は長くなるので省くが、内容は戦前の名門ゴルフ場のクラブハウスの歴史が中心で、戦後神奈川県体育センターとなり、合宿所とグラウンドとして使われてきた歴史が書かれている。

今は鬼籍に入られた長沼・平木・コンビでクラマー氏のサッカーを後世に伝えてきた功績は大きい。藤沢の体育センター・グリーンハウスで、クラマー監督による日本代表(東京オリンピック)最初の合宿が行われたのが1960年だったと思う。当時は現在の教育センターのあたりがグラウンドだった。当時を偲ぶサッカーの話がこの冊子に幾つか載せられている。

私の記憶の中にあるのが、1961年日本代表の合宿の時、毎日、藤沢本町の氷屋で大きな氷を買ってリヤカーで運んだ事、当時初めて練習後のアイスマッサージをしたこと、怪我人の打撲や捻挫を直ぐ冷やしたことだ。

その時のスタッフの人達で思い出すが、長沼、岡野、平木、八重樫氏らの顔である。

1970年代は、神奈川県国体選抜選手の合宿でよく使わせてもらった。そして湘南高校の夏の合宿でも何回もお世話になった。また湘南の学校行事の「陸上競技大会」では、必ず陸上競技場を使用し、管理棟になった「グリーンハウス」を利用した。この中に入っている「食堂の玉屋さん」の先代のオヤジさんとは長いお付き合いであった。又管理人のオジサンともお付き合いが長かった。

そしてもう一つ記憶に残るのは、1981年「昭和56年全国総合体育大会」を神奈川県で開催した折、サッカーの事務局をこの「グリーンハウス」に置き、数ヶ月間準備の為にここで仕事をした。この年は勝沢監督率いる清水東高校が強く、多くの優秀選手をそろえ優勝したが、この時三ツ沢で初のナイターを実施したという懐かしい思い出がある。

このように一つの建物を描くだけで、沢山の思い出と「物語」がある。私の描く作品にも歴史物語があり、沢山の思い出が甦ってくる。この原稿を書いている時に、東日本大震災が起きた。毎日TVで放映される、地震と津波の生々しい記録、加えて福島原発の大惨事、何を見ても痛ましい事ばかり、この年寄りは何をすれば良いのか、思い悩み積極的に行動を起こせないのが悲しいが、この紙面を借りて何とか早く復興できる事を祈り、亡くなられた犠牲者のご冥福を祈るばかりである。



相模線入谷駅から大山を望む

こちらも相模線（茅ヶ崎～橋本）の無人駅（入谷駅）前、駅舎の向こうに大山が見え、田んぼの畦道からのスケッチは楽しかった。稲藁の積み重ねてあるものを、土地の農家の方が教えてくれた名は「いなむら」とこの辺では言っていた。これも懐かしい景色である。



ひょうたん駅（御殿場線・上大井駅）

2008年初期の作品で何も解らず、天気の良い日は出かけて描くのが楽しい時期だった。友人の住む御殿場線の無人駅「上大井駅」別名「ひょうたん駅」とも呼ばれ、駅構内に瓢箪棚があり、見事な瓢箪がぶら下がっていた。懐かしい景色である。

描く楽しさ

(中メールNo.47 2004.6.22)

標題に生意気な題名をつけたが、最近時間に余裕が出来たので少し下手な絵を描きだした。別に絵心があるわけでもないのに、描き出すと時間を忘れるほど楽しいし、集中できる。下手の横好きと言う奴で、何も解らず夢中で描いているので、そのうちに挫折するかもしれない。

そんな訳で最近では地方のサッカー大会に行くと、絵になりそうな場所を探してスケッチをしつづける。先日も関東高校サッカー大会が栃木県であったので、朝早く散歩をして、絵になる場所を探して描いてきた。（これからはもう少し本格的に描いてみたい）今回の本題は絵の話より関東大会の話である。

さて関東高校大会も今年で47回になるが昭和33年に私が大学を出た時に始まった大会で90%近く付き合いしてきた大会である。プログラムにある「栄光の記録」を見ると、浦和市立、習志野、浦和南、古河一、帝京、市立船橋、優勝常連高、の中に湘南の名前も燦然と輝いている。

そして出場回数も7回・優勝1回・準優勝1回の記録はすばら

しい。この大会も回を重ね、時代の流れから随分と変化してきた。特に今年は定着してきたプリンスリーグとの関係で、チーム事情県内予選のスケジュールの関係等で必ずしもその県のトップチームが出場していない県もあったようだ。

大会の発展について高体連はどのように考えているのか解らないが、チャンピオンを決めて上に繋がらない大会なのだから、各県の2番手チームを集めて大会を盛り上げるのも一つの方法かもしれない。以前各県代表4校で大会を開催した時代があったが、その時も同じねらいがあった様に記憶している。

結果は準決勝、桐光0対1前商、流经大柏1対0佐野日大、決勝、前商対流经、で流经の優勝で終わったが、かなり高校生の試合としてはレベルの高い内容だったと思われる。特に神奈川県代表の桐光学園は対帝京戦、対市立船橋戦の2試合は良い試合をやっていたので高く評価出来るだろう。



ジャックの塔（開港記念会館）
2007・11・22・同じくこの時に描いた作品であるが、後から見ると本当に雑で素人丸出しの作品である。只あまり余計な知識もなく怖いもの知らずで描くタッチは後から見るとそれなりに魅力のある作品だとも言える。



キングの塔（神奈川県庁）
この作品が私の絵を本格的に描こうとする大きなきっかけとなった。（石坂浩二の三塔物語、開港 150 記念展覧会）へ出品して「優秀賞」を頂いた。

書く事・描く事の難しさ

(中メールNo.31 2003.2.20)

毎度下手な文章を載せているが、我ながらいつも反省ばかりだ。モノを書くのは本当に難しい。私のように文才が無く、語彙も豊でない人間がこの様な文章を書くのは自分には向いていないのではないかと思うことしきりだ。特に「HP」は世界へ発信され、知人や教え子だけならまだしも全く知らない人に見られていると思うと冷や汗が出ることが多い。

それだけ責任あるモノだと思えば筆が進まなくなる。OBのY氏のように次から次へと横文字が出てきて難解な文章表現で売っているのも「プロのモノ書き」は凄いなとも思うし、ほとほと感心させられるが、こちとら別に銭を貰っているわけではないのでと割り切つて何とか筆を進めている。氾濫する「カタカナ語」と言われているが次の文章はどうなっているのでしょうか。

中村俊輔についてHPの一節

(シンプル)な展開(パスプレー)と勝負(プレー)の(バランス)広い動きが噛み合い始めた俊輔 今の(レグジーナ)では(コアプレーヤー)の一人です。まあ(ディフェンス)貢献度では最終勝負(シーン)での(ポジションニング)や(アタック)など大きな課題を抱えています。

只マスメディアの書いたもので「サッカー人」の参考になるものは殆どないと言う事。ましてやテレビで解説している人種は殆どタレントの部類でサッカーを教えている人達「コーチ」に対しては参考になる話など全く聞けないと言う現実を見ると、何か参考になる事を少しでも書きたいという気持ちになって来る。その程度のものだと理解して下さい。

話は変わりますが「倉岡先生」昭和40年代に湘南高校定時制におられてOBの何人かサッカーを教わり、当時講師で「相工大附属」に行かれサッカー部を作った方。その後出身地の広島に帰えられて、母校「舟入高校」で定年退職された。懐かしい先生の作品です。(30・31ページ他参照)

彼は「版画」「水彩画・油絵」が専門で、広島県の展で何度か優秀賞を頂いている プロ顔負けの先生です。1昨年退職記念で「個展」を開かれたので わざわざ広島まで行って見てきましたが、さすが、と感心して帰ってきました。

実は私も密かに「絵」の勉強をしています。こちらも奥が深くてまだまだです。彼の作品と私の「駄作」と比較して貰えればわかると思います。



アスレチック・ビルバオ練習用グラウンド（ビルバオ郊外）

バスケットが誇る100年以上もスペインリーグ1部を堅持し、優勝8回が自慢のアスレチックビルバオの素晴らしい練習グラウンド（天然芝5面、人工芝2面）



グッゲンハイム美術館（スペイン・ビルバオ市内）

スペインのバスケットが誇る、何とも馬鹿でかい、スケールの大きな建物とピカソを中心の抽象的、前衛派、の作品展示、訳の解らないものばかりだったが、何となく気持ちはスカッとした。

50回の区切り

（中メールNo.50 2004.10.10）

2001年17回・2002年・10回・2003年・12回・2004年・11回でこのメールも50回になった。「湘南高校の現役の様子」を中心に、神奈川の高校サッカー、国体のこと、日本のサッカー、世界のサッカー、技術論を主に言いたいことを並べてきた。そして最近では個人的な「絵画の世界」まで発展した。

2001年・5月に書き始めた「中メール」も50回を迎え、此処で一つの区切りとして、少し休ませて貰いたいと思っっている。本心はこれで終わりにしたいのだが、別紙に50回の内容をまとめてみたがなかなかバイティーに富み、結構OBにも読んでいただき色々反応があるので、取り敢えず休刊としたい。

日本のサッカー事情も大きく変化してきている、現職の「サッカー協会・会長」の立場から現実を逸脱した事も書けないので、色々苦労している。即ち親元の「日本サッカー協会」が急速に変化するの、ついて行くのが大変である。

大学卒業後も京都の大学で毎日「筋電図」を眺め「キネシオロジー」の世界に首を突っ込みキックの分析・メカニズム等を勉強しながらサッカーの指導書を仲間と一緒に執筆したのが昭和34年だった。そんな経験を通して学んだ物を湘南に赴任して現場に生かしたのが昭和36年になる。

未だその頃は神奈川の高校も参加校が24〜36チームだったと思う。サッカーの専門家も2、3人で全て一人で運営してきた。審判・技術・大会運営全般：試合もW・Mシステムを殆どの学校がやっていた。そんな時代に始めて4人バックでスイーパーを置いた新しいシステムで昭和40年に関東大会で優勝した。あれから40年経ち高校サッカーも随分と様変わりした。

今年は3月に現役と一緒にスペイン遠征に参加して、あのバスケット地方独特の「アスレチック・ビルバオ」の純血主義・100年の伝統「おらがサッカー」を見てきて、ヨーロッパのサッカーの本質を垣間見て来た。湘南高校の生徒にはこの経験は凄い財産になったと確信して帰ってきた。

「百聞は一見」見る事・経験する事・湘南高校生徒の将来を考えて、この遠征は隔年であっても継続させたい事業だと思っている。その後6月にはポルトガルまで行き「ユーロ2004」準決勝を観戦してヨーロッパサッカー100年の歴史を理解出来たよな気がしている。



プレシヤ・豪邸（スペイン・ビルバオ郊外）

この町の川沿いの屋敷は大変ゴージャスな家ばかりが立ち並んでいた。
 (日本の逗子、葉山、鶴沼)を思わせる大西洋・カンタブリア海に面した港町。



選手宿舎（スペイン・ビルバオ郊外）

静かな田舎町にある、いわゆるスポーツシュレ（気の利いた合宿所）
 気持ちの良い快適な1週間の合宿生活が出来た。

2006年の抱負

(中メールNo.8 2006.1.1)

「生涯サッカー人・指導者・コーチ」

「良い指導者の出現を願って」

私の宝物の一つに1冊の本がある。「昭和36年発行・学芸出版社・京都市」、「キネシオロジーによる新体育スポーツ選書6・サッカー」著者・竹内京一（協力・瀬戸進・田辺喬・鈴木中）となっているが、殆どは大学の同窓（東京教育大学）の3人で原稿を書いた記憶がある。京都市内の喫茶店で毎週会ってコーヒーを飲みながら議論して書き上げた懐かしい思い出がある。

教員としてスタートしたこの時期に大先輩竹内先生（京都学芸大学教授）の指導のもとに夢中で研究し燃えていた時に書いたこの本は、今にして思えばたいした物でもないが、その時の情熱を思うと胸が熱くなってくる。京都大学の生理学の研究室で筋電図の機械と取り組み、人体解剖を見学して、筋肉のメカニズムを勉強し、キックで使う筋肉は？キネシオロジーとは何か？を毎日のように夜遅くまで議論した時代だった。

指導者の資質を問う時、最近は何かライセンスだけが先走りし

て、手先の方法論ばかりを論じている様な時代になってしまった。本来はその人の持つサッカーに対する情熱とかビジョン、人間性から来る哲学があつてそこから生まれる指導力がコーチの資質と言えるのではないだろうか。そんな思いを込めて私の尊敬する指導者（3名）の名前をあげて見た。

先ず思い出されるのが京都に赴任した時（昭和33年・紫光クラブ監督として）指導を受けた、前述した竹内京一先生（現在82歳お元気）湘南に赴任した時（昭和37年）にお会いしたデッドマル・クラマー氏（今年で80才）。現在神奈川県サッカー協会の技術委員、現役の三村恪一氏（現厚木マーカス・コーチ）この3方が3指に挙げられよう。お三方ともにビジョンと哲学のある情熱家であり、確固たる信念を持った理論家でもある。

さてその本「サッカーのキネシオロジー」について、取りたててどうと言う内容では無いが、40年以上も前に取り組んで書き上げた物としては非常に立派だとも思うし、何よりも現代サッカーに十分通用する内容である事も褒めたいと思う。当時はサッカーの技術を目で見る物が何も無かった時代である。そこで議論して書き上げた若き指導者の姿勢と情熱がこの本を見る度に伝わってくる。「私の一冊の宝物である」



京都時代の出版物（昭和36年発行）

大学卒業後直ぐに京都へ赴任（昭和33～36年）3人の仲間と書いた苦心の作品。クラマーさんに教わった全てが中心であった。加えて筋電図やら分解写真やら今にして思うと本当に若き日の旺盛なエネルギーだったと思う。



サッカー「本の内容と紹介」

基礎技術・応用技術・ゲーム・に分かれているが、私は基礎技術を担当したと思う。半世紀も前の話で記憶が薄れているが、中心は「正しく蹴る、正確に止める、相手の逆を取る、」がボール扱いの基本であると言う、クラマーの教えを強調していた。そこから派生する親切なパス、ショート、シュート、ロング、の組み合わせ、4対2、5対2、のパス練習、スルーパスの出し方、タイミング、ボールの質とか走る姿勢、ステップ、フットワークなどなど、きめ細かく基本のキを強調し、これは現代サッカーにも通じる理論だとも言える。特に私は現代サッカーの「クサビのパス」の出し方をどうすれば良いのかその当時から苦心してきた事がうかがえる。そして蹴られたボールの質が「Good」「Poor」かどうかはサッカーの醍醐味だと思っている。（最近の基礎技術は大きく変化しているか？）

本：「サッカー」中ページ



参考作品（倉岡氏作）砂浜 湘南海岸 1975年 F 50号油彩

辻堂在住時代、湘南海岸が好きでよく散策。この砂浜をモチーフとして広島県美展に10回出品（入選）した中の一点。



YCACグラウンド（横浜外国人クラブ）とクラブハウス

筑波大学とYCACの交歓定期戦が107回になる（2011・4）明治から100年以上も続いている、歴史あるサッカー日本一の定期戦である。昨年から人工芝になりこれからも益々活発になり続けていくよう努力したい。

オシムのサッカー

（統中メールNo.21 2007.7.7）

今回は7が3つ並んだめでたい日である。何か良いことがあれば等と考える。

どうも年のせいかなそんな事が気になる今日この頃である。周りを見渡すとバタバタとサッカーの仲間が亡くなられる。そして病で倒れる話が多く寂しい限りである。そんな中で湘南OB・ペガサスの70歳以上が元気に蹴っておられるので感心している。すごい事である。

6月末に湘南高校44回生合同・同期会が卒業後38年ぶりに行われた。百数十名の盛大な集まりであった。担任でも無い私が参加させてもらったが、既に鬼籍に入られた先生が「石井（ポケサン・数学）・栗原（クリさん・国語）・松山（物理）」の3名、同期の生徒が10数名もいた。ご冥福を祈ります。「合掌」幸いにサッカー部の同期生は（桑本・主将、小泉治子・マネージャー他・坂部・小杉・本庄・橋本・溝口・・・）皆元気そのものだった。

さて本題に入るが「オシム・サッカー」について、彼の色々な言語録、スピーチ、ユーモア、などなど真意は何処にあるか直接話したわけではないので、私が感じたままを書いてみたい。基本的には「相手より早く、大きく・質の良い動き」「競り合いに負けるな」そして「パスで崩せ」。チームの総合力で相手を上回れば良いので、個人のスターはいらない。独断的指導法か？

このように書くとも40数年前から湘南生に言い続けてきた私のサッカーとレベルが違っても本質は同じような気がする。一番の共通点はシュート場面でフリーな味方がいればパスをせよ、いなければ勝負する。即ちサッカーの原理原則を大事にする。この思想は彼のサッカーの基本であり本質であるような気がする。私はサッカーの魅力の一つだと思っている。

「オシム・サッカー」は多分選手には嫌がられる、厳しさと、理論規律、を最重点に置いたヨーロッパスタイルだとすれば、湘南のサッカーも合い通じるところがあるかもしれない。いや南米型のジーコスタイルは湘南向きではないのだろう。そんな事を感じながら、現役は次のチームに変わる為の準備に入り、間もなく冬の選手権一次予選が始まる。

何れもスケッチは現場で、仕上げは家で、最近では「デジカメ」の力で現場の再現が出来るので、うきうきと「お絵描き」を楽しんでいる。絵は現場で描かなければと言われる先生が多いが、私はあまりこだわっていないが、「倉岡さん」の絵はさらっと、現場で描いた素晴らしい作品である。



白樺湖スキー・宿舎

昨年の冬（2008年）何10年振りかでスキーに出掛けた。最近はスキーも短くなり、老人には非常に扱い易くなった。ゲレンデはがらがら、滑るのも楽しい、滑った後の、温泉良し、酒良し、・・・全て気分爽快、良い作品が描ける。



箱根湯本早川の紅葉、

紅葉は今が一番といわれた11月中旬、色付いた山並みを背景に描いて「日本の秋」を感じた。出来上がった作品を海外にいる教え子達に送ってやろう、などと思いながら筆を進めた。遠くに見える山並みの紅葉、足元を流れる早川のせせらぎが美しかった。



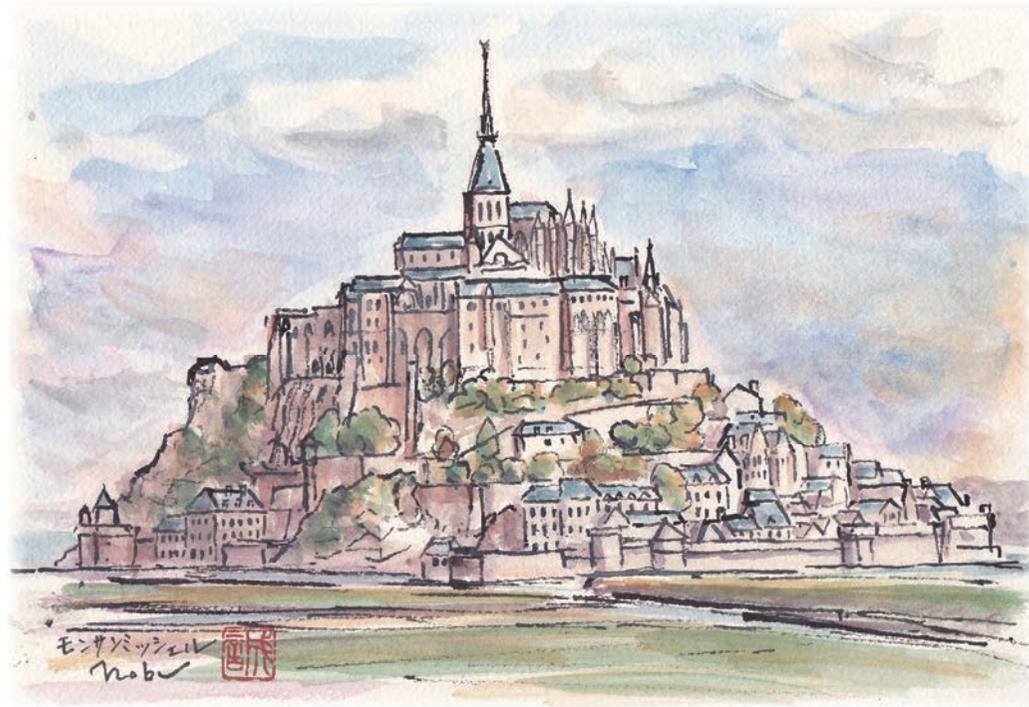
上野岩崎邸

湘南高校、PTA、OBの「ひばり会」と言う年寄りの集まりで、旅行を計画している。今回は上野の岩崎邸の見学だった。久しぶりにお付き合いしたが、モチーフとしてこの建物が素晴らしかったので、皆さんが見学中にスケッチを楽しんだ。



乗鞍スキー場・ログハウス

宿舎前のレストランで孫達と楽しい昼食、スキーよりアフターの乗鞍温泉での休養は何と言っても楽しい一時であった。



参考作品（倉岡氏作） モン・サン・ミッシェル フランス 竹ペン・水彩
海の中の岩山にそびえ立つ修道院。人気の高い世界遺産。この絵は堤防の途中から見た景観。江の島とイメージが重なり合う。



参考作品（倉岡氏作） サン・マロ フランス ペン・水彩
昔は港として栄え、現在はリゾート地として有名なサン・マロ。ホテル前の砂浜からの夕日。城壁がシルエットに見え感動のひと時。



リュミエール美術館（フランス・リオン市内）（映画博物館）

同行のTVK・S君の推薦「映画博物館」は中身より外から見た邸宅と眺めは絵になる素晴らしい、景色だった。今回の旅行で印象に残るベスト3になるだろう。リュミエール兄弟は1895年、初めて映画を上映した。



サンティエヌ駅（パリ、リオン経由・3時間）

フランスリーグ観戦の地（この地元チームに松井大輔選手が活躍していた）サンティエヌはプラティニがプロになったチーム。

本当にサッカーは面白い

（続メールNo.33 2008.7.7）

ユーロ2008（ヨーロッパ選手権大会）を今年は全ての試合をTV観戦した。誰もが口をそろえて言う。何でこんなに面白いのか。ワールドカップも面白いけれど、また違った楽しさを味わえる事ができる。一口では言い切れないが「歴史と伝統に培われた、サッカー文化」があり「お国柄」があるからだろう。

只サッカーの高度な技術にプラスされた国民性とか歴史と言っても解からない人が多いと思うが、高度な戦術の中に含まれる「ヒディング魔術」のような監督采配あり、過去の国と国の戦争に纏わる歴史があり、リーグ戦の戦い方と一発勝負のノックアウト方式のトーナメントの戦い方もある。南米やアフリカ・アジア等が入らないから面白いと言う見方もある。

予選リーグでの戦い方から、群を抜いていた、オランダが1対3ロシアに敗れ、クロアチア1対1トルコにPKで破れ、ポルトガルが2対3ドイツに破れ、イタリア0対0スペインはPKでスペインがベスト4に上がった。準決勝はトルコ対ドイツ、ロシア対スペインになった。これまた色々な意味で面白さ、興味深さがある歴史に残る試合になった。

準決勝の結果はドイツ、スペインが勝ちあたり順当と言えばその通りだが、ドイツはトルコに3対2で実力を見せ付け、ミラクルターキーも此処までだった。スペインはロシアに3対0で完勝パスで崩し、いなしてスルーパスからシュートの得点で、監督の采配も見事に当たり、魔術師ヒディングのロシアも完敗で散っていった。

決勝戦は大変興味深く世界中が注目の1戦になった。したたかなドイツ、技とまよりの出てきたスペインの一戦は予想通り見事な試合であった。勝負強さを見せ付けたドイツであったが、やはりサッカーは技術と戦術が勝負を決め、その上例年には無いまとまりを見せたスペインの優勝は、価値ある「賞賛に値する優勝」だったと言えるだろう。

3時半起床のWOWOWのTV観戦に合わせた6月の生活を元に戻すのは時間が掛かるかもしれないが、70歳を過ぎた爺が連日興奮して観る「サッカーの魅力」をどう説明してよいか判らない。只言えることは「サッカーと言うスポーツ」は「麻薬」のように犯されてしまうと辞められない魅力あるスポーツである事は確かである。



42 回生



43 回生



44 回生

還暦の会（42回生・2008年11月）
 上の学年2学年・下の学年2学年、サッカー部OB会会長・副会長を招待して藤沢のホテルで50名ほどの参加を得て、盛大に行われた。60歳と言う区切りの年にこのような集まりを企画した事は良かったと、ほっとしている。



46年前の紅顔可憐な美少年たち

還暦の祝い

（中メールNo.36 2008.10.10）

今年の高校選手権大会2次予選のプログラムの「チームプロフィール」に湘南のところは「選手権出場6回」文武両道の校風とサッカーが校技の伝統校、7年ぶりの2次予選進出、と書かれてあった。おおむね正解だが「文武両道」「サッカーが校技」「伝統校」はどう理解すればよいのか、人さままであろう。

表題の還暦の祝いを「42回生」が11月に行う。厳密に言うところ昭和42年卒業は彼らが2年生の時、関西で開催されていた全国高校選手権大会、44回大会に出場したメンバーが全員集まるらしい。当時の彼らの上の3年生、下の1年生が集合30名ほどの「爺」が集まるそうだ。それぞれ一流大学を出て、一流企業のトップのメンバーばかり、中には医者が数名、文武両道の伝統校だったのだろう。（当時の写真掲載）

今年の「関東大学リーグ戦」は1部が神奈川大学、東海大学と慶応大学が活躍している。神大が地元出身選手を中心に関東1部で頑張っている、平塚会場の試合を見る機会が多くなり、又私の母校筑波大も見る機会が出来て足を運んでいるが、未だ何となく将来の夢を託すという意味から大学サッカーはそれなりに楽し

く見させてもらっている。

彼岸を過ぎると一気に涼しくなった。外に出る気分も晴れやかにこの秋は大いに好きな「絵」の世界に挑戦しようと思っている。今回掲載の「湘南のグラウンド」は正面の新校舎と、「歴史を語る、楠の古木」彼らの還暦のお祝いに贈る予定。

今回が50回目です。一つの区切りである。そして(中メールと併せて100回になる)。テーマに「脳の活性化」とうたったが、特別な事でもなくごく自然な事で、年をとったら頭を使い、身体を動かすことが大脳を活発にして衰えないと言う学説が最近の脳科学で明らかになってきたと言われている。だから豊かに日々を重ねるほど、脳が成熟するそうだ。

別に私の学説でもなく、頭と身体を使うと言うことなのだが、絵を描くこと、文章を書くことが「脳の活性化」に繋がると理屈では解る。「絵」を描くにはそれなりの準備が必要である。天気が良い、気分が良い、体調が良い、即ちベストコンディションでなければ良い絵が描けない。そして体の良い状態で見ると、同じ物者でも美しく見えてくる。

文章を書く場合、色々な資料を参考にする。新聞も雑誌も、サッカーの試合の観戦も、国際試合も、子供達の練習も、大学生・高校生の試合も、代表チームの監督の意見も、世界のTVでの情報を、などあらゆるサッカーの世界の資料を参考に、A4一枚の原稿が出来上がるのだ。それらの活動が「脳の活性化」に繋がるわけだろう。

「蹴球道」

三村恪一(元日本代表)

華道、書道、剣道、柔道、など日本には「道」がつく技芸が多々ある。いずれも専門的な手法、手段が厳しく求められ、それに反するものは外道とされる。中先生の教える、語る、サッカーは正しくは「蹴球道」と言うべきであろう。攻撃は、如何にして自軍の攻めを拡大するか、そして守りは、相手の攻めをどうやって狭めて行くかの術を追及した指導である。ボールを正しく蹴る技を身につけるためには、何万回かの研鑽の先にしかない通常に口にされる。幾度ものワールドカップ本大会やヨーロッパでの本格的サッカーの現場観戦により「サッカーもどき」を見抜く感性が高く、国内での諸ゲームの評価の目は鋭い。中先生の指導を直接受けられた選手と指導者は幸せだ。横文字サッカー用語を安易に口にして中先生の酒をまずくしない事を心がけたい。



中賛記、中祝記かずかず

東西南北から
喜びの寿を祝って

鈴木中先生と 湘南高校に捧げる賛歌

倉岡誠親（大学の後輩）

私生活を通じて、私の生き方は、湘南高校に奉職したことが大きな基調となりました。鈴木中先生をはじめ、多くの同僚や先輩方と出会いがありました。わずか三年でしたが、私は家庭の事情で広島に帰ることになりました。その後、湘南高校の生活と思えば私の第二の故郷として貴重なものとなっています。神奈川県にご縁をいただいたのは、教員採用試験で、宮原孝雄氏（鈴木先生の前の監督）、鈴木中先生の両先輩とのご縁によります。鈴木先生は、東京教育大学サッカー部の先輩として、私の在学中、OBとして合宿や試合で親しくご指導いただきました。丸い大きな眼、説得力のある語り口が印象でした。私たち後輩は、親しみを込めて「チュンさん、チュンさん」と呼ばせていただきました。

教員採用試験に際しても、鈴木先生のお世話になり、新婚間もない新居に泊まらせていただき、若く清楚な奥様の暖かいおもてなしを受けました。試験合格後、鈴木先生のお世話で、当時、湘南高校の校長であった香川幹一先生にお会いでき、「私が面倒見よう」という一言で、定時制に採用していただきました。着任して、湘南高校が全国有数の進学校であり、文武両道に輝いていることを初めて



知り、びつくりし、誇りに思いました。定時制には、湘南サッカー部OBの岩淵二郎先生（英語科）、山田勉先輩（湘南出身でハンマー投げの名手）、添田徳積先生（主事・湘南OB会事務局長）はじめ多士済々の皆さんの出会いがありました。私も「良く遊び、良く学ぶ」時代でした。全日制、通信制、定時制の別なく、親しく交流させていただき、ちょうどそのころ、絵の好きな同僚の小嶋忠先生（数学科）といっしょに油絵具一式を買い求め、私の油絵の第一歩が始まりました。

鈴木先生とサッカーのことで印象に残っていることは、先生のサッカーの指導法は、クラマー氏（ドイツ人）の基礎重視の理論的なものでした。自分でプレーをやってみせて指導する姿は、昼間に相模工業大学付属高校（現湘南工科大学）の新設サッカー部を指導していた私にとって勉強になりました。また、サッカーで特に思い出すのは、昭和42年の関東大会で、当時としては革新的なスイーパーシステムの戦術を使って、湘南高校を優勝に導かれたことです。藤沢駅から高校まで歩いて凱旋パレードされたことは、鮮明な記憶となっています。絵については、鈴木先生が校長をされていたころ、多忙の合間、デッサンに励んでいたと聞いております。先生が絵に親しんでおられることがきっかけとなり、先生とのご縁がさらに深まりました。先生が発信されるホームページ「中メール」には、湘南高校への愛校心、サッカーについての分析と解説、それを支える情熱に心打たれるものを拝見しています。その中に湘南の海と神奈川の風景が添えてあります。先生の絵は、素朴で、味わいのある描

き方で自分のスタイルを貫いています。その風景には懐かしい郷愁を感じます。時には、私の絵も掲載していただいて、大きな励みとなっています。

定年退職したとき、私は、広島県美展の入選作品を中心に広島市内の会館で個展を開きました。その節は、鈴木先生と奥様お二人で、わざわざ広島まで激励に訪れてくださいました。遠路のご来場に感激し、いまま先生の暖かいお心に感謝しています。先生はスケッチに出かけることを「お絵かき」とおっしゃっていますが、これから楽しい「お絵かき」を重ねて下さい。奥様とのお幸せな日々を祈念いたします。

補記

この文章を見れば誰でもお感じになると思いますが、本当に真面目な私とは全くイメージの違う堅物の先生と思われるでしょう。しかし人間の本性は判らないものです。本当は彼の作品を見ればお解りになると思いますが、優雅な自由奔放な人間味あふれる性格が、湘南に居た数年の間に美しい湘南レディーを射止めて故郷の広島でシアワセな家庭を築き、最近は一人で世界を飛び歩き奥様は「詩吟の先生」本人は「名画伯」として老後を楽しんでおられます。羨ましい限りです。



参考作品（倉岡氏作） エギナ島 ギリシア ペン・水彩

エーゲ海クルーズでエギナ島へ。港の近くのカフェテラスで紅茶を飲みながらスケッチ。青空、赤い屋根、紺碧の海と舟が調和。

喜寿に寄せて

宇野 勝（神奈川県サッカー協会会長）

喜寿、金婚式そして湘南高校奉職五〇年、本当におめでとございます！

日本全国いろんなところで、『私は、神奈川県出身で、チユン先生の教え子です！』と、胸を張って言う多くの人々に合つ都度、チユンさんの偉大さを感じ、先生とはこうであらねばならない、と改めて勉強させられました。

こんなに立派な先生だという事を奥様は、ご存じないかと思えますが半世紀の間、真実にご苦労様でした！

今は、夫唱婦随で水泳に良く行かれると聞いていますし、奥様のシニア水泳全国大会での活躍ぶりを良く自慢しておられます。『よく、頑張っているんだヨ』と、嬉しそうに語られるその姿を見るにつけ、近頃は、奥様の勝ちかなと感じております……

いつまでもお二人で、元氣にお過ごし下さる事を心からお祈りしながら、私の個人的な思い出話「三つのシヨック」を認め、お祝いの言葉に代えさせていただきます

シヨック1……（註／紙面の都合で「補足」にて説明）

シヨック2……画伯としてのチユンさん

依頼状で曰く……喜寿を記念する作品集を作るにあたって、「中メー

懐かしい思い出話が縷々書かれてありました。

喜寿のお祝いに際して

牧村 英樹（37回生・OB会会長）

男性の平均寿命と言われます「喜寿」を心身共にご健康で迎えられるましたこと、なによりとお祝い申し上げますと共に、心よりお慶びを申し上げます。

初めて先生と顔合わせをさせて頂いたのは、昭和36年、先生が湘南高校に赴任されサッカー部の監督となられ、キャプテンをしていた私が職員室に呼び出されこれによりです。校技であり、長い歴史を歩んできた湘南高校サッカー部とはいえ、前年度の関東大会準優勝を除けば、長きに亘り戦績としては芳しい状況ではありませんでした。先生のご着任に伴い新しい練習方法が導入され、熱意あるご指導の賜物により早々にもご着任初年度にサッカー部として何十年ぶりとなる「国体」そして「全国大会」に出場する栄誉を得る事が出来ました。たいした力量もなかった私達にとって厳しい監督であり同時に良き兄貴的存在でした。秋田国体での思い出、全国大会時の西宮く京都での思い出、今でも懐かしくそして楽しかった一時が思い出されます。先生から見れば最初の教え子となる私達も相応の

ル」の内容で勝負するのか、それとも「下手な水彩画」でアピールするのか……

『チユンメール』で勝負をして欲しかったと思えます。

文章の方はともかく、『50の手習いで始めた。』と謙遜されますが、「海、山を卒業し、最近では建物に興味をもって筆を持つ」とおっしゃるとおり、近頃の水彩画を拝見すると、当時を知る者には信じられない上達ぶりで驚いております。（失礼！）

シヨック3……勝負師のミスキャスト

挙げると枚挙のない数々の業績を残してこられた、（社）神奈川県サッカー協会の会長を70歳の定年を迎えられて退任される時、いつも簡単に「次は、お前、やれ！」と言われた時もまた驚きました。何の業績もなく、若輩者の私に出来るはずがないし、みなさんの信頼を得るはずもないとお断り申し上げましたが、なぜか術中にはまってしまい大任を託される身になってしまいました。

きつと心の中では「ミスキャスト」だったと思われていることでしょうが、それなりにみなさんの協力を得ながらやっております。

教わったとおり、『勝負師らしく、開き直って』任期を全う致しますので、個人的にはもちろんのこと、神奈川県サッカー協会をこれから長くご指導下さい。

中補記

実は「シヨック1」がありました。紙面の都合で残念ながらカットさせていただきます。それは20年前の話で新幹線の車中、二人で「花札の勝負」をして、私が勝って随分と悔しい思いをさせた

年となりその間多くの人達との出会いを重ねて今日を迎えておりますが、多くの出会いの中で、その後の私の人生に大きく影響を受けたとても大切な出会いをさせて頂いた方々がおられます。鈴木先生は私にとりましてはその中のお一人であり、今日に至るまでその出会いに対し感謝の念を持ち続けています。

先生は多分最後まで今まで同様、サッカーの指導者であり続けられるでしょう。私は先生に教えて頂いたサッカーを可能な限り楽しみながらプレーし続けたいと思っています。

「喜寿」は新たな人生のスタートラインです。

いつまでも 若々しさを!! そして心豊かな毎日を!! 念じつつ……

半世紀の付き合い

小泉親昂（39回生）

昭和三六年五月鈴木中さんが京都から湘南に赴任してきました。最初の練習のとき、当時一年生であった私はおすおすと「母が退院するので今日の練習休ませてください」といったのが鈴木中さんと口を聞いたはじめてであった。以来五十余年サッカーを通じお付き合いが続いている。国体へ二度、全国大会、関東大会と出場させてもらっ

たこともいい思い出である。

その間サッカーの指導法も学び、後輩の指導や藤沢、鎌倉の小学校を回り、少年サッカーの種まきをしたのも今になれば、中さんからサッカーのイロハを学んだ、もつとも口頭ではあまり教えられたという記憶はなく、そばにいて盗んだといったほうがいいが。

その後、3級審判員として神奈川リーグを吹く機会も与えられ、サッカーと関わってきたが、考えることがあり政治の道に進み30年、市会議員、県会議員として政治活動を行いながら、たまにグラウンドに出てボールを蹴る程度の関わりを持ってきた。中さんが定年を迎えるとき、第二の人生の場を先生の行きたいところに幹旋しましょうかといったところ、中さんは「俺は県のサッカー協会の仕事をやるから」と言われたことはよく覚えており、その後県サッカー協会が社団法人になるときに側面からお手伝いできたことはよかったと思っっている。現在は県サッカー協会の理事を仰せつかり、サッカー発展のために微力ながら尽力していることも中さんとの出会いのおかげと思っっている。

最近地域の福祉活動や自治会の活動をしているが、リタイアした男性がどう生きていくかということに様々な課題があることを痛感している。中さんの生き方を見ていると、サッカーを通してさまざまな人々との関わりを持っており、好きなことで一生が送れることは大変幸せなことではないかと思っっている。

中さんへの手紙

山田仁夫（40回生）

ガンさんの墓の前にどっかりとあぐらをかき、手を合わせる中さんの写真がある。春は桜も満開。少し酔っっているようだ。ガンさんの命日である。私にはちよつと「痛い写真」だ。ガンさん・中さん・仁、と敷かれたバトンタッチレースを暴走し、脱線した。時代を繋ぐ連結器がひとつ外れるとダイヤはなかなか取り戻せない。

久しぶりの湘南高校。練習グラウンドで見かけた中さんはひたすらゴールポスト脇のドラム缶に薪をくべていた。これも滲みだ。

私の知っっているガンさんは、時折グラウンドに立ち、卵を抱えた皇帝ペンギンのようにいっしょにボールを蹴り、試合の前日には明日のゲームへの囀も入れた。もちろん中さんのお膳立てだ。中さんには膳もなかった。その用意は私の役割だったはずだ。

ゴールポスト脇の中さんは、血迷った後続の機関車に後を絶たれ、なおも次の出発への火を絶やさぬよう薪をくべつつける老機関士のように思えた。今も滲みる、遠い昔の湘南高校での冬の日の光景だ。ガンさんの命日から一週間後、前日の雨も上がり、墓の桜も散り終えた気持のよい春の日だった。湘南高校現役の関東大会予選。今日からシード校との対戦だ。その日の会場はまるで大きな鳥籠のよ

之を楽しむ者にしからず

飯田志農夫（39回生）

湘南でサッカーをしたのは、半世紀も昔の遠きことだが、今に至るまで鮮烈な思い出がいくつもある。まずは、赴任されたばかりの鈴木先生のもとの夏合宿。猛練習はまさに体力、気力の限界への挑戦。この厳しさは、何かをモノにするには不可欠なこと知った。さらに当時の私が苦しんでいた不眠と鬱的気分が治ってしまった。また以後の人生で苦境を乗り越える上で力になる実体験になった。鈴木先生の指導方法は、メリハリの利いた効果的、効率的なもの。先生自らの実技見本と明解な解説付きで、指導は実践的で具体的。リーダーの指導のあり方として、後年自分が仕事をしていく上で基準、見本となった。

最初の夏の終わり、国体の神奈川予選で優勝した時、「楽しかったろう。またやろうぜ」と鈴木先生は言われた。その時、サッカーは厳しいけど楽しい、と実感した。やる気がわいた。先生が長年にわたり絵を描いておられるのを知ったのはずっと後になってからだが、その楽しそうな様子を拝見するたびに、「人生「楽しむ」のが一番、という思いを深くする。

うな高い金網に囲まれたグラウンドで、鳥籠の入り口にちよこんと取っつけたように置かれたテーブルに中さんは座っていた。中さんの手招きで鳥籠に入り、ふたり肩を並べて試合を観ることになった。母校を応援しつつボールを追い、選手たちの流れを追って戦況を見守った。ふと……遠い昔にあったような、なかったような。目の前のサッカーと交錯した不思議な時間だった。なぜかその時間が無性に嬉しかった。その後も2羽の鳥は首を左へ右へと動かしながら、サッカー談議という餌をついばんでいたようだ。試合は負けた。雨上がりの霞のせいか、どこか懐かしくて柔らかな一日だった。私は鳥籠を持ち帰り、今も部屋の片隅に吊るしてある。

こうした私の消すことのできない苦い思い出を、中さんは私に面と向かって一言も触れたことはない。言葉の選びようもないが、ありがとう。

2012年6月16日。総体予選。桐蔭に負けた。終了後、県協会のグラウンド建設予定地をふたりで見に行った。雨のそぼ降る中、さまざまな角度から現場写真を撮っていた。中さんの最後の仕事であり、また夢だったんだらうなあと思いつつ私も濡れながら付き合っただ。線路を挟んだすぐ向かい側に特別老人ホームがあると伝えると見に行くと言って車を回し門をくぐった。職員の説明を聴きながら、「ここからなら（グラウンドが）見えるだらう」

と言ってパンフレットまでもらっていた。このオッサン、どうやら本気らしい。

中 補記

仁君は何故か最近まともな顔をして湘南のグラウンドに顔を出すようになった。卒業後40数年ぶりだろう。還暦を過ぎると人間また元に戻るのかも知れない。指導者としての血が騒ぐのか・後輩が可愛いのか？現役選手の前に立つと、流石に的を得た事を言っている。本人の最大の自信である、ボールを相手から奪うノウハウ、ヘディングの競り合い、等守るといふ技術を是非伝えて欲しいと願っている。

横浜港に吹く風

植松二郎(41回生)

鈴木中画伯の作品について書きます。

中さんはあるときから絵筆を握りはじめた。幼少のときから素養があったのかどうかは知らないが、うわさを聞いた者(とりわけサッカー関係者)は寝耳に水であった。よせばいいのに酔狂な、という批評もなくはなかった(私ではありません)。

しかし、ひとつ言えるのは中さんのその一念発起がよくある「定年退職後の暇つぶし」という動機ではなかったことだ。平成3年中さんは舌腫瘍の切除手術をした。その2年前に局部のみを取り26回の放射線治療を施したが、全治せずついに5分の3の摘出となっ

画伯のほのぼのした絵を眺めていた。

私たちの代と中さんとは干支が同じである。ひとまわりちがいだ。30歳の監督は18歳の少年にとってきわめておっかなかったけれども、77歳と65歳だとどちらも同じ爺さんである。



補記

私は植松二郎君の作品が大好きだ。「織田作之助賞」受賞の(春陽のペリーロール)は古典落語を感じさせる洒落の利いた一味違う作品だった。他にも「毎日児童文学賞」を受賞した作品も読ませてもらったし、他にも新幹線の座席に置かれた冊子にも何回か名前が出ていた。まだまだ若いから私の生きているうちに又大きな賞?の受賞を期待している。

祝喜寿

関口 真(42回生)

還暦後すでに3年を経過、今もサッカーを楽しんでいる原点は中先生を始め湘南高校サッカー部にある。故岩淵先生のサイドキック、走法指導、中先生のパス&ゴール攻撃の切替、ポジショニングとチームワークの教えはその質と技術が整えば、あの「バルセロナ」を髣髴させるものか・と思つ。それは、全日本、なでしこ、シルバー、



ペガサスetcプロでも遊びでも当てはまることであり、その組み合わせ、程度により楽しみ方、関わり方も違うが、サッカーの面白さの本質を教えていただいたと理解している。基礎的には3対2の練習で創造、反復され、チームワークは長年の湘南の歴史と共に連続として培われて来ている。私は関西より、毎年の蹴球祭に参加することを続けたいと思つているが、現役指導、OB会運営に携わる皆様に感謝申し上げると共に喜寿を迎えられる中先生のますますのご健勝と湘南サッカーOB会の永続を心より祈念している一人である。

(第8回関東大会優勝の思い出)

思い出としては第8回関東大会において優勝出来た事である。湘南の得意とするパスサッカーに加えて、それぞれの選手の個性を生かしたチームワークの賜物と言える。会場は茨城県の水戸市、1回戦は東京の大泉学園、大雨の中、相手フォワードにGKの目の前でフリーのシュートを許す。万事休すとの瞬間、ゴールライン上の水溜まりでボールがピタッと止まり、抽選勝ち(0-0)。準決勝では栃木宇都宮学園を延長の末破る(1-0)。決勝では帝京高校に左ゴールポスト際のヘディングで早々に点を入れて逃げ切り(1-0)。強豪に地団太を踏ませた。ある者は駿を担ぎ、必ず水戸駅まで新聞を買いに行き、雨でドロドロのユニフォームを皆で洗い助けたのが印象的である。まさにパス(サイドキック)、攻守の切替、パス&ゴール、ポジショニングとチームワークの湘南のサッカー教えの結果である。湘南サッカー部のご隆盛を遠く大坂より応



た。「手術の夜、閻魔様に舌を抜かれた夢を見た」などと強がりのホラを吹いていたが、その消耗は想像を超えるものだったろう。手術を終え、ようやく水が喉を通るようになったころ、病室の窓から見える丹沢山塊の景色に息をのんだ。とつぜん強い絵心に襲われた。生死の境の川を往復させられて還ってきたひとが「いままでの桜とちがう桜に見える」というのはよく聞く話だが、病室からの丹沢山塊もそうだったのだろう。つまり中さんの絵筆開眼には、なんといおう、いのちのやりとりが係っていたわけである。

中さんの作品がある絵画賞に入選したというのはビッグニュースだった。展示会が横浜港の大榎橋ホールで開かれると聞いて出かけた。港の海の香りがこちよい会場、そのなかに中さんの作品が晴れがましく展示されていた。横浜市内にある県庁(キングの塔)を描いたものである。私は、ほうつと声をあげた。絵の中に陽がさんさんと降りそそぎ、気持のよい風が吹いているのだ。なんとも、ほのぼのしている。知らない人が見たら、この作者はいままで一度も憎まれ口を聞かず、いつも温和で穏やかな人にちがいないと誤解しただろう。そう、知らない人が見たならば。

私はしばらくぼんやり眺めた。高校時代、スタンドからグラウンドに向かって振り下ろされた身震いするような叱咤。あれは地獄の門番のようだった。私たちが優勝した第8回関東大会、帝京高校との決勝戦1対0でリードしたままあと残り数分というときのベンチ前の仁王立ち。あれが見えたとき、おれたちは勝ったぞと確信をしたものだった。そんなことを思い出しながら、横浜港で長い時間

援している。

補記

関東大会決勝戦の日曜日朝「先生ごミサに行ってください」と言っ
て水戸のキリスト教会に出かけて行ったのが強く印象に残ってい
る、熱心なクリスチャンだった。彼は私の教え子としては最高の選
手（CF）だった。関東大学リーグでの活躍、日本代表候補、そし
て日本リーグ住友金属鹿島へ、現在のJリーグの基礎作りに貢
献した功績は素晴らしい。世が世ならJリーグを背負って立
つ人材だった。

45回生還暦を祝う会を開催

浅倉 泰（45回生）

45回生還暦を祝う会を平成23年11月に、藤沢グランドホテルにて
開催しました。この会は42回生が還暦を迎えるにあたり、鈴木先生
をお呼びして祝宴をやったのが始まりのことです。その後、上下
2代のOBを呼んでやったらどうかとの先生の発案で2回続きま
したが、4回目の今回はどうせやるなら賑やかにやろうと言っ
て上下3代、42回生から48回生の7代のOB、49名の参加を頂き盛
会となりました。

に違いないと思えてきます。

湘南高校の生徒とは違う目的をもった才能ある「上澄み」の若者
たちをコーチするのは本質的に異なるチーム作り。そこには、と
ても多くのアイデアと苦労が詰め込まれてははずです。今度は、
その視点で、お話を伺わせて下さい。

チユンさんのことから、喜寿になられますますますご壮健のこと
でしょう。厳しい原稿催促のメールを読みながら、そのことを体感
しております(笑)。これからお元気でサッカーを極めてください。

中さん..カリスマ先生の 足練口管?

鈴木啓介（48回生）

湘南に行くとき全日本ユース代表監督にコーチしてもらえろ。

中学からの憧れを胸に、入学前の春休みから練習に参加しました。
オールバック、日に焼けた赤銅色のお顔、ギョロツとした目に魅入
られるような感じ。あの頃、おいくつだったのでしょうか?ブルーの
トランクス、ルックアップして周囲を見ながら、柔らかいトラッ
プで反転して前を向き、左足のインフロントに軽く乗せるだけで
スーッと糸を引くようなセンタリング、まだまだ掛け値なしに現役



我々の代は9名ですが、8年前に若くして亡くなった山口晴夫氏
の奥様、君枝さんに参加して頂き、紅一点場を盛り上げて頂きまし
た。先生からは『おまえらは人数が少ないから、全員に絵を描いて
やる』と、当日は抽選で1人1人思い出深い湘南高校の風景画と先
生がお持ちになっていた昔の記念品を頂きました。
先生は大変お元気で舌鋒鋭く、参加者のスピーチに突っ込みを入
れておられました。先生の益々のご健勝とこの会が未永く続く事を
願っております。

鈴木先生、喜寿、 おめでとつございませう

湯浅健二（46回生）

そう、チユンさん、もう77歳か。考えてみれば、わたしも今
年は年男。月日の流れを感じます。諸行無常・
チユンさんには、サッカーの楽しさ、奥深さを教えていただいたと、
いまでも感謝しています。

コーチする対象のほとんどが、素人か、それに毛が生えた程度の若
者たち。それも、学校教育の一環としてのサッカー。いま考えれば、
それは、とても大変な仕事であり、逆に面白く、楽しいものだった

でした。

中カリスマ性に加え、この学年は全国制覇も夢ではない(後
に毎年恒例だったと判明した名セリフ)をはじめ、ガキどもがイチ
コロにされたのは、その手練手管ならぬ「足練口管」(読み方不明)
でした。

以下、小生のプレーに対する中さん語録です。

1 「チヨローンとやるんじゃない!カラダを張れ!」

足先だけのプレーへの注意。擬音語(多用されました)は
諒解したものの、体って、どうやって張ればいいんだろ? 若年
性の素朴な疑問、ご容赦。ちなみに、胸を張る。ってのくらいは常
識として知ってましたが...

2 「ケースケ、何をやっとなだ。バテたんならやめろ!ツライ
ならやれ!」

千葉遠征、苦手だった雨中の試合、ハーフタイムのご注意(先日、
久々に会った一学年後輩の相馬君が思い出させてくれました)。当
然、「ヤリマス」と答えるほかなく...

時を経て、慶應大学、東京工業大学で体育会系と揶揄される研究
室を主宰し、思わず学生に「カラダを張ってやれ」と言っている自
分を発見(苦笑)。かつてのグランドでの原体験は、日々の言動に
色濃く反映されているのかもしれない。ただし、昨今、〇〇ハラ、
とかいうヤツカイなものがあり、そのまま適用はアブなすぎますが
...、喜寿をお迎えになり、どうかご自愛の上、悠々とした境地をお
楽しみ下さいませう。

数年前になるが「啓介先生」の受賞のお祝いをした。「日本化学賞」「フンボルト賞」のダブル受賞で、将来のノーベル賞候補だと紹介されたが私にはあまりびんと来なかったが、大変な賞だと言う想像はできた。その後生徒を（三年生）対象に講演をお願いした時に知ったのだが「東工大副学長」だと言う肩書きを聞かされた。益々の活躍を期待したい。

中先生の水彩画を見ながら

細川周平（48回生）

3年前、ある賞をもらったのを記念して中先生の水彩画を一枚いただいた。茅ヶ崎漁港から江の島を望む図で、八年前から暮らしている京都のマンションの玄関に掲げている。艦をつながれた二艘の漁船が妙に「昭和」を感じさせる。4、5年前、OBの集まりで風景画を描いているのを知って以来、何か欲しかった。数作、候補を上げてくださったなかから、小さい頃から見慣れた江の島を描いた作を所望した。藤沢の実家をよく訪ねるので湘南地方の空気から隔絶したわけではないが、馴染の風景を見るのは心休まる。だがそれよりも、よく知った人の眼と筆を通して描かれた絵であることが大

込む味方にそとつなく柔らかいイラストパスが見えてくる。サッカー部員が部室で先生の口調を真似していたことも思い出す。口真似でなく、あの動作の真似をできたなら、ぼくらはもっと強くなっていたのに。平和な風景画は、そんなこんなを語ってくれる。

文中にある賞・(第60回読売文学賞)・「遠くにおいてつくるもの」(ブラジル移民100年)の記念作品はかなりの大作で年寄りが読むのに苦労した記憶がある。記憶に残る一文に「現地の日本人が(うどん)は食べる物であるけれど、故郷の味であり、郷愁であり、日本そのものである」と書かれてあった。私の実弟がブラジルへ移民して半世紀、既に鬼籍に入ってしまったが、日本を思う気持ちは我々には計り知れない物があると何時も感じていた。

中さんの掌の中

関 佳史（48回生）

湘南サッカー部OB会事務局を20数年、ペガサスの代表、そして平均して月に一度は中さんの鞆持ち。高校のサッカー部がこれ程人生に於いて重要になるとは、夢にも思わなかった。現役では期待されたがチームは低迷。大学で体育会に入る自信もなく、湘南クラ

昭和45年（1970年）入学の代なので、中先生40歳前後に教えを受けたことになる。その濃厚なメニューは、前提となる体力も気力も技術もない高校生には大変きつかった。絵を見ていてと思いつくことがたくさんある。茅ヶ崎漁港まで行ったことはないが、辻堂海岸まで走った（走らされた）ことはある。鶴沼海岸へ同級生のサッカー部員、中嶋修君と行ったことがある。3年の体育祭の前日夕方、クラスのボードの下絵から本体までをほぼ一人で描いた彼は、海を見ようとぼくを誘ったのだ。そこで二人は放心し涙した。ああ青春！



45回生 還暦祝い



仮に有名な画家が湘南海岸を描いていたとしても、芸術性に感心するだけだろう。中先生の絵はそうではない。描いた人の顔も声も歌もじかに聞こえてくるようにだし、背にした敵をまいて一瞬のうちに前に出る動作や、走り

ブでプレーを継続。その後、サッカーを12歳から45年以上も継続できたのは、中さんの3年間の練習のおかげだ。湘南の教育方針は文武両道。仕事とサッカーの両立も文武両道なのか？井上孝先輩から、「仕事を継続して、サッカーができることは実は難しい。」と改めて教えられた。ペガサスでも、様々な理由で、プレーを離れる人々を沢山見た。振り返ると中さんの掌の中においてサッカーを続ける自分がある。そして、サッカーは定年後のテーマの一つとなる。

湘南サッカーと仲人

沢田ミツル（50回生）

天童、仙台、さいたま、鹿島、川崎、横浜、静岡、磐田、名古屋、神戸、広島、福岡、鳥栖。ここ2年間で訪れた、Jリーグのホームスタジアムの所在地です。

「お孫さんですかー？」と言われるくらい、歳の離れた小学生の末っ子と一緒に、Jリーグ観戦&ホームチームのタオルマフラー獲得に向かっています。親父である僕は、息子のCS（顧客満足度）向上を狙いつつ（笑）、各地の銘酒と肴を楽しみながら史跡・名跡を巡る旅でもあります。そして、きれいに整備されたサッカーグラウンドの緑を眺め、ぼんやりとする束の間の空間でもあります。

仕事に追われてしまい家族サービスがほとんどできない僕でしたが、ようやく末っ子とはなんとかコミュニケーションできるのも、湘南サッカーのお陰だなぁー、と思う今日この頃です。

湘南サッカーといえば「中さん」。迷選手であった僕は何を教わったのか覚えていませんが、一つだけ絶対に忘れないことがあります。それは、仲人をお願いしたこと。

お陰様で、二男二女の子供に恵まれ、二十余年前に中さんのご自宅に連れて行った長女も既に社会人です。家内も子供たちも、皆元気で。

中さん御夫妻に深く感謝すると共に、お二人がこれからも活き活きと過ごされることを心よりお祈りしております。

我が湘南サッカー部雑感

水戸将史(56回生)

昭和53年4月、隣の中学校からひょいと引越してきた感覚で高校の門をくぐりました。藤沢一中時代のサッカー部顧問は知る人ぞ知る「山口晴夫」先生。高校に行くとはイコール、サッカー部に入ることが前提でした。

ものにする柔軟性、理論では説明できない瞬間的な閃きも大事にした。もっと言うと両方を求めた。硬軟併せ持ち、手堅く規律ある教育者でありながら、新しい考え、方法論を前向きに取り入れた。

その幅の広さ、懐の深さが湘南サッカーの伝統を築き、神奈川をサッカー先進県にのし上げたのだとあらためて思う。その功績の一端は、私もその恩恵に浴したのだが、当時異色の存在であった故・相川FIFA公認コーチの県協会への抜擢にも現れていた。鈴木中と相川亮一というまったく異なる二人の偉大な師から短期間であつたがその薫陶を受けたことは、今なお続く私のサッカー人生の中で大きな意味を持つ。

ボールを蹴り始めて早45年。直接指導を受けたのは高校時代のわずか3年なのだが、いくつになってもやはり中「先生」なのである。師弟関係というのはそもそもそういうもので当然なのだが、でも、そういう気持ちは一体どこからくるのだらうと考えてみると、53歳になる今でも、「八木のあのプレーはよかったな」と中さんに褒めてもらいたいと願う教え子の自分がいることに気づく。そして、この歳になってもそんな青臭さを持っているのはなかなかのことじゃないかとあらためて思い、また中さんに褒めてもらおうと、際限も無くひたすらにサッカーを続けるのである。

この寄稿文をこれから送りますと師の携帯をならしたところ、その人は旭高校のグラウンドで、いま湘南の試合が始まったところだといい、携帯の向こうからは選手たちの声が聞こえた。喜寿のその歳でも高校サッカーの現場に立ち続ける師の神髄を感じた。



「ワもての先輩達が多くいる中で、我々新入部員はグラウンドに入らずコンクリートの上。基礎的な練習で半年が過ぎましたが、これが貴重でした。また鈴木先生が口を酸っぱくして言われていた「5対2」の重要性は、後でよく分かったことです。

2学年からは試合に出れたり出れなかったり。ウイングのポジションなんて柄じゃないと思いつつ、もともと鈍足な自分にとって「突貫小僧」で慣らした鈴木先生の足技を見よう見まねで真似たものでした。

小粒の選手しかいなかったチームで、新人戦の湘南ブロック優勝は意外だったのでしょか……。その後、県大会ベスト16で負けましたが、戦友と3年間続けられたことが何よりの誇りであります。

喜寿にあたって

八木啓太(52回生)

1968年メキシコ銅メダルで火がつき、小・中学校で仲間たちと楽しく自由奔放にやっていたサッカー。湘南に入ってから中先生と出会い、技術戦術の指導というものを初めて受けた。指導は受けたが鑄型にはめられることは無かった。中先生は正しい技術・サッカーの常識を重んじ、それを指導の要としながらも、サッカーを豊かな

中先生、沢山のものを与えてくださり本当にありがとうございます。湘南高校サッカー部の初代女子マネージャーとしてお祝い申し上げます。これからも益々ご壮健でサッカー界に刺激を与え続けてください！

初代女子マネージャーとして

小泉治子(44回生)

中さん(と呼ばせて頂きます)、喜寿おめでとございます。湘南高校サッカー部の初代女子マネージャーとしてお祝い申し上げます。高校に入った当時の私のブームは、兄たちの影響もあり世界で一番人気のあるスポーツはサッカーであるというものでした。中さんにサッカー部のマネージャーにして頂いて有頂天になった覚えがあります。もともとマネージャーの何たるかも全く知らず、雑務一辺倒、部室の掃除やボールの紐の調達(その頃のボールは紐で編んでいたのです)、試合の時のレモンの準備(当時スポーツ飲料などもありませんでした)などをしていただけでした。中さんに指示された一つに高体連の手伝いがありました。ワープロもパソコンもメールもない時代、大会があるたびに各高校への案内状の宛名書き、郵便局からの発送が私の仕事になりました。何回かやっているうちに中さんに褒められたことは、宛名書きがうまくなったな、とい



う一言でした。残念ながら本当はへたくそのままでしたが中さん一流の使いのうまさ(?)に乗せられました。

お陰様で社会に出て結構使われ上手になり、仕事を続けることができました。

最初にお目にかかった時に中さんは30代前半だったと思います。が、その後たびたび集まりでお目にかかっても、あの当時に感じた怖さというか貫禄は何年たっても変わりません。いつまでもお元気です。

人に囲まれて生きることのシアワセ

本島玲子(53回生)

大学時代以降は殆ど実家を離れて暮らしてきたためか、たまに鎌倉に帰り、江ノ電に乗ると、高校生くらいの気持ちで周囲を眺めてしまいます。とはいえ、実際には当時の中さんより10歳くらい年上。時が経つのは速いものです。

幸か不幸か日本人の平均余命は延びる一方で、高齢者に接しても、70代は準現役、80代になって「ちょっと年をとったかなあ」と感じさせる人が多い時代になってきました。しかし、現実的には個人差



までも変わらな
いお元気な中さ
んとお会いする
機会を持って、と
ても嬉しく思っ
てきました。今
では多くの日本
人選手がドイツ
のブンデスリー
ガーなどで活躍
する時代を迎
え、私も彼らの番組取材などに関わりながら相変わらずサッカーに夢中になっています。

また、数年前から先生が素晴らしい絵をお書きになるという一面を知り、懐かしい湘南の風景などを楽しく拝見させて頂いています。これからも益々お元気でお過ごし下さいますようお願い申し上げます。

中 補記

1998年W杯の時私達が宿泊していたパリの2流ホテルを訪ねてきて、森君(54回)と宮井君と合流し食堂で美味しい生牡蠣とワインを飲みながら夜遅くまで語り合ってから、既に15年にもなりまして。そしてユーロ2000の時にわざわざデュッセルからブリュッセルまで来て湘南のOB達と一緒に昼食をしたのが思い出される。

もあるわけで、そこを分けているのは物事の捉え方のような気がします。つまり、地位だの体力だのを「失った、できなくなった」という喪失感に苛まれるか、「まだこれができる、あれが楽しみ」と前を向いて日々を過ごせるかの違いです。

その点、中さんは心配ないですね。53回生全体の同期会で挨拶する幹事に「話が長くてつまらないぞ」と叫び、50歳過ぎのおじさんおばさんになった私たちに可愛がられている姿を見て、確信しました。これからもお元気で。

喜寿おめでとうじびぎいます

宮井真純(52回生)

私の高校時代の思い出と言えば、放課後の練習、紅茶やタオルを持って出かけた週末の試合や合宿など、ほとんどがサッカー部のことばかりです。あの頃は土ほこりの中を駆け回る部員と大声で怒鳴っている中さんを見ているのが大好きでした。卒業後ドイツに渡ってからもサッカー熱は続き、初のワールドカップ本大会出場を果たした日本チームを応援に先生ら一行とパリで合流。会場に流れた「君が代」を一緒に歌っていた中さんの目が潤んでいたのが忘れられません。その後もヨーロッパ杯やWMドイツ大会などで、いつ

次のヨーロッパ選手権には是非行きたいですね!「写真」ブリュッセルでの試合前の様子(中)

これが、僕らの、夢だった!

篠塚 毅(54回生)

さて私も「サッカーの深淵に引き込まれた」半生を歩んで参りました一人ですが、その発端は間違いなく湘南サッカー、鈴木先生との出会いでした。1977、78当時の主将として、選手権県大会を控えた重要な学校行事・修学旅行を集団スキップ、全教職員の大非難の嵐から身を挺して我々を守ってくれた鈴木先生:それでも尚、全国大会出場という先生の思い、我々の夢を実現できず痛恨の準決勝敗退…。ほのかな満足感は抱きながらも、悔しい思い出が詰まった高校時代。大学卒業と伴にサッカーから離れた自分でしたが、やはり何か忘れ物をした感覚が残っていたのか、同期の藤塚久雄君が母校の監督として全国への夢を叶えてくれたことを目の当たりにし、折しもプロリーグ設立のニュースに居ても立ってもおれずJリーグ設立事務局に転職。1993年5月15日、国立競技場、メインスタンド屋根裏、新開発の試合記録システム責任者として、涙をポロポロ流しながら開幕戦を記録。

Jリーグ退職後も縁あってラグビー・トップリーグ設立、プロ野

球・日本ハム札幌移転、バスケットボール・日本リーグ改革と国内メジャースポーツの「変革の現場」に携わるといふ幸運に恵まれました。しかし、私自身が「サッカー出身」という事実を差し引いても、何か不完全燃焼と言わざるを得ない感覚が付き纏います。そう…今また、サッカーの存在の大きさに気付かされました。Jリーグ開幕に多くの国民が共有したこの「フレイズ」は、鈴木先生はじめ先人達が営々として築き上げたサッカーへの一途な思い、重み…その土台があったからこそ、このスポーツが本当に多くの人々に愛されて



2004年スペイン遠征の帰りのパリでの買い物、岩田・寺尾先生と

いるからこそ、「文化」と呼べる存在に近づいているからこそ、サッカーに許されたものであったのか…と。

この度の記念誌ご発行を心よりお慶び申し上げます。

スペイン遠征で 湘南生が得るもの

篠塚 貴志(82回生)

2003年度に始まった湘南高校のスペイン遠征に、学生の身分でありながら私は2005年度から3回連続、5回の遠征のうち3回の遠征を経験させて頂いた。清水先生が発案されて3回、小林先生が英国のテイストを加えて2回、遠征は継続的に内容・質・参加者を増し、価値を高めてきた。ビルバオという伝統的なチーム、そしてバスケットという誇り高き民族の土地に足を踏み入れた湘南生が何を感じ、それぞれの将来に向け何を得たのか。ロンドンという価値が加わった2度の遠征を経て、スペイン遠征の価値はどのように変化したのか。

「湘南高校は日本一の高校でなければならぬ。」鈴木先生の口癖。

「アスレチック・ビルバオはスペイン一のチームでなければならぬ。」バスケット人の口癖。

自分たちが一番である誇りを持たずして一番には成り得ぬことを知っている人々が、バスケットにもいた。湘南生が持ち続けるべき文武両道の誇りに似た思いが、バスケットにあった。サンマメスを震え上がらせるバスケット人の心は、湘南生が忘れてはならぬ心なのかもしれない。スペイン・イギリスの2カ国での試合・交流・観戦から得られるものは、湘南生の将来に生きる宝物か。10日間の遠征、それは人生の中で一瞬の出来事かもしれない。しかし、ビルバオでの経験にロンドンでの試合・交流が加わった10日間のスペイン遠征は湘南生の心に一つの思いを残す。その思いが、スペイン遠征のもたらす最大の価値。「もう一度、ここへ。」スペイン遠征での経験から湘南生が得るものが、湘南高校サッカー部の強化に留まらず、選手それぞれ

の明るい将来と、湘南高校の継続的な文武両道・日本一へと、そして私自身の大きな将来へと繋がらんことを、心より願う。

この度の記念誌ご発行を心よりお慶び申し上げます。



「写真」 バスケ自慢のおらがビルバオ「アスレチック」のホームグラウンド「サンマメス」は120年の伝統と誇りのある素晴らしいスタジアムだった。同行した元湘南の教諭(岩田・寺尾・先生)と感嘆の声を挙げた、懐かしい記憶が甦った。多分生徒達も多くの物を吸収しただろう。

親子で体験湘南サッカー部

榊原和久(46回生)

2007年(平成19年)3月、長男の和洋が湘南高校の入学合格通知をもらい、早速、恩師の鈴木中先生に「ユニ」で連絡したところ、「湘南のグラウンドに連れて来い!」との指示、天気の良い土曜日に息子と久しぶりに湘南に出かけ、息子と共に湘南サッカー部を再び体験できる楽しい3年間がスタートしました。日曜日の試合は、家内と応援に行くのが楽しみとなり、中先生のカバン持ちで、夏休みの「時の栖」での合宿、春休みの「八千代カップ」への応援等に参加させてもらいました。自分の高校時代と全く同じで、①良い指導者、②親切で頭の良い友人、③素晴らしいサッカー環境 に恵まれ、息子がサッカーを3年間楽しくでき、文武両道を目指し、社会に巣立って行くために人間として必要な人間性を少しでも身につけてく

1969年アジアユースサッカー大会メンバーの集い

鈴木 中

43年前の高校生が昨年「還暦」を迎えた。そして鬼籍に入られた監督の平木隆三・コーチの八重樫茂夫氏そして3人の選手（千葉・平田・市川）君を偲び、2012・2月に東京で集まりを持つ事が出来た。私が34歳の若さで高等学校側の立場で総務兼主務雑用を全て任された。思い起こせば「検見川」での長期合宿、その前の「藤枝」での選考会、「正月の大会」での選手選抜そして「バンコク」での本大会（湘南OBの酒井さんには随分と現地でお世話になった）年齢が2歳も年上の優勝したビルマの選手と公式の戦い、「マレーシア」での親善試合、バンコク日本人会のレセプションなどなど話は尽きず、又合いましたよと言つ事でも再会を約束した。その後彼らは日立、古河、鋼管、三菱、東洋、八幡、富士通・フジタの日本リーグで活躍し現在のリーグの基礎作りに貢献した功績は高く評価されるだろう。東北・埼玉・静岡・広島の選手が多く定年後も皆「元氣な良いサッカー爺」になり、これからは集まる事が多くなれば私も是非老骨に鞭打って参加したいと思つている。

（故人7名）（欠席・平田（八幡）・木本・古前田（フジタ）・小原（東洋）・村松・菅原）6名
 「出席者・写真」
 荒井公三（古河） 大谷榮一（三菱） 崎谷誠二（八幡） 須佐耕一（古河） 鈴木道雄（古河） 河野和久（日立） 鈴木 中（総務） 藤島信雄（鋼管） 関久雄（富士通）

「大会参加・JFA 記念ペンナント」



れたことは、本当にありがたい事だと感じました。私自身もそうでしたが、サッカー部時代の友人（上野キャプテン、松元君、亮ちゃん、石井親分、廉隆君、等）は、人生での掛替えない親友です。息子も湘南サッカー部で得た交友関係を大切に、これからの将来の道を切り開いて行って欲しいと思います。中先生、これからも、親子共々、ご指導下さい！中メールはこれからも見たいです。それとお酒の宴席はいつでも喜んで準備しますので、いつまでも元気で下さい。

スペイン遠征の思い出

榊原和洋（85回生）

サッカーを通じて異文化に触れられてよかった。これがスペイン遠征について思うことです。遠征中は私たちが思う「普通」とは違うことが目の前で沢山起こり、当たり前が当たり前でなくなる瞬間を多く体験しました。このように非日常的な体験を日常的にしているからこそ、言語も国籍も関係なくピッチにたてばいつもと同じように熱く、楽しくできるサッカーの魅力をよりいっそう強く感じました。またサッカーというスポーツを共有していることで異国の異文化の中でも人間の輪を広げることが出来、現地の人たちと不思議



俊邦のカミサンから

故鈴木俊邦（39回生） 令夫人

とコミュニケーションがとれる感動を味わうことができました。現在、私は将来スポーツに携わりながらワールドワイドに活躍出来るよう日々勉強とサッカーに動んでいます。スペイン遠征はこの目標をたて、それに向かって私を動かすエネルギー源の一つになっており、今後も大切にしたい経験です。
 なかなかグラウンドに応援に行くことは出来ませんが、湘南高校サッカー部のさらなる飛躍を願っています。

「おいおい、君が書くの？」と誰かさんの声が聞こえてきます。いいんでしょうか中先生。私は片田舎で育ち、実は、サッカーなるスポーツについては観たこともなく、ルールも皆目わかりませんでした。誰かさんこと「俊邦」なる人に巡り合ったとき、彼はそのことに驚き、哀れな人を見るように、サッカーがいかに面白いかと中学時代のチームメイト、吉光先生、湘南の岩淵先生との出会いから語り始め、湘南入学後のサッカーの日々をほんとうに楽しそうに話してくれました。そして何度聞いたことでしょう。「ちゅうさん」と。当時サッカーはTV東京が社会人の試合を放送していま

したが、これを観ながら解説が始まるのです。その間に高校のお仲間のこと、中さんのこと、国体のこと懐かしくて堪らないといった様子で話したものです。子供がサッカーを始めた時は、少年審判員の資格も取り、年を経てからはシニアのチームに参加させていただきました。サッカーがW杯、オリンピックで注目される今、大いに盛り上がりたかったでしょう。他界して7年余、世の中は余りにも多くの変動がありました。マスコミの人間として、もっと現役でいて欲しかったと思います。

中先生が「ただし」先生だと初めて知りました。墓前で「知ってた？先生の読み名」と聞いてみました。先生が茅ヶ崎の海岸からお持ち下さった小石にちよつと書き足してまいりました。「ただし」と。

鈴木俊邦内 展子

中補記

「俊邦」としくじりと私は呼んでいたが、業界（出版関係）の仲間達には（しゅんぽうさん）と呼ばれ、その道（・・・社の編集長）としてかなり有名な実力者だと言われていた。サッカーを語らせ、



「墓参り」(小川町山合いの菩提寺)

書かせるが一流だったが・・・ボールを蹴らせると私の見たところ？流だった。でも高校1年で西宮の全国選手権大会、2年で秋田国体、3年で岡山国体、出場の輝かしい記録は彼にとっては語る材料が沢山あったと思う。惜しい人材を亡くした。残念だった。ある時ゴルフ帰りに御殿場の近くの「小山町」の静かな山合いの菩提寺に同級生（山宮、小杉、新田）君と私で墓参りをしてきた。茅ヶ崎の海岸で拾った石に「中」と書いて置いて来た。又何時か元気に訪れたいと思っている。(合掌)



39回生ゴルフ(御殿場)

御礼

故山口晴夫(45回生) 令夫人

中先生と私どものつながりは昭和52年1月30日、亡き主人山口晴夫との結婚式での出会いからです。主人が一番大事に考えている方と言う認識を致しました。それは私の知らない高校生時代からのサッカーへの関わりでした。それは今日まで続いております。

サッカー、人生の師と仰ぎ湘南の地にいました所私どもも色々な事を感じて頂きました。それでいて決して威張ったところなくいつも私どもに温かな優しい態度で接してくださいました。馴れ馴れしい言葉かも知れませんが私どもは先生を親のようにお慕いしてしまいました。主人の人生最後の一番の思い出はきっと1998年のワールドカップで先生のおかげでフランスの地で先生と「君が代」を熱唱した事だと思えます。私結婚当初から



教恩寺(鎌倉・大町)

休日、春、夏休みのほとんどが湘南サッカー部で私より中先生と接する時間が多く常にヤキモチを焼いていましたが今はそれが素敵な思い出になっております。有り難うございます。

中補記

春の彼岸の数日前に我が家の墓参り(鎌倉霊園)の帰りのバスの中でふと思いついた。確か「晴夫」の菩提寺が駅の近くだったはずだ。駅前の案内所で聞くと、「教恩寺」は直ぐですよと教わり墓参りをしてきた。前日に法事でもあったのか立派な花束が供えられていた。多分お父様と晴夫自身の法要があったのだと想像した。親よりも先に三途の川を渡ったのは無念だったと思うが今は二人で楽しく語りあっているだろう(合掌)

伝えること、継続していくこと

若木 均(64回生)

中学まで野球一筋だった私は、湘南高校サッカー部で鈴木中先生や藤塚先生、諸先輩方や同期のみなさんに多くのことを教わりました。そして、今もグラウンドに立ちますと鈴木先生の教えが浮かびます。技術面では、特にヘディングとインステップキックが挙げられます。グラウンド脇にあったペンデルボールを使って、ヘディン

グの基本姿勢、ジャンプヘッドを繰り返して練習したことを思い出します。インステップキックは、助走はワンステップ、膝から下のふり、弾道は腰くらいの高さで30mを蹴れないとだめ、というものでした。技術面に限らず、戦術や取り組む姿勢も含めて、鈴木先生が「伝えてくださったこと」は数多くあります。そのうちひとつでも心に残っている・体にしみみついている、ということは貴重で得難いことだと



宝物の参加章



64回生全国大会参加記念額



今更ながらに感じます。

現在、小児科医となった私は、昨年総合病院を辞し目黒で小児科クリニックを開業いたしました。医者には、患者さんや親御さん、地域に対して教育を行っていく役割もあります。またサッカーを始めスポーツに育てられてきた(と思っている)私は今回、親子で一緒にからだをつかって遊ぶ「親子教室」の活動も始めました。鈴木先生が実践なさっている教育者として伝え・継続することの難しさを、素晴らしいというものを感じつつ、私も「伝え、継続する」ことを行っていききたいと思えます。

国立を目指す！

田村直也(64回生)

県立の進学校である湘南高校が神奈川県代表になることで大変なことなのに、さらに全国4強以上を目標とすること。高校入学直後の当時の私にとって、鈴木先生から最初に聞いたこの言葉に少々違和感がありました。

そして、湘南高校サッカー部を卒業して約22年。明確なビジョンとその進むべき道を示してもらったことが、のちにいかに重要であることなのかを思い知ることになり、今思い返すと自分の人生観に



まで大きく影響することになった一言です。
小さな目標は、越えやすく、堅実で、苦勞も少なく、時に心地よささえある。それでも大きな目標を掲げて、その実現のために出来る限りの努力をし、楽しむことを今後も大切にしていきたいと思っています。

このたび、喜寿をお迎えになるとのこと、心よりお喜び申し上げます。いつまでもご壮健で、ご活躍されますようお願い申し上げます。

文武両道の象徴

鈴木中先生への感謝と湘南サッカーへの期待

川井 陽一(前校長)

スペイン、イギリス遠征出発の前日、顧問の小林周太郎先生からミーティングで一言話をするよう依頼を受けました。セミナーハウスのドアを開けると60余名の生徒の靴がきれいにというより見事に揃えて脱いでありました。部員の心構えが象徴されていました。今春、横須賀にある陸上自衛隊高等学校(旧少年工科学校)の卒業式に出向きました。校長先生が京浜急行に乗られた際、車内で湘南高校サッカー部員全員が勉強に勤しんでいる姿を見て感銘を受けたという話を伺いました。

鈴木中先生には、半世紀にわたり湘南サッカー部を支えていただき感謝に堪えません。また、九十周年記念誌の表紙を先生の水彩画で飾らせていただいたことにも心よりお礼を申し上げます。先生は、『湘南サッカー創部90周年特集号』に寄稿された文章の中で、指導者が徳育者であること、目標は高いほど良いこと、フットボールは技術＋頭脳＋精神力であることをあげられています。鈴木先生の理想とするサッカーを、今、小林先生と現役生は間違ひなく追求しています。冒頭の例を引くまでもなく、極めて高いレベルの文武両道の象徴的存在が湘南サッカー部です。「サッカー部が湘南の価値を高め」、そして、「湘南がサッカーそのものの価値を高める」ことができると思っています。そのためにも、鈴木先生には引き続きのご指導とお力添えを心よりお願い申し上げます。

出会い

小林周太郎（湘南高校・現顧問教諭）

初めて中先生にお会いしたのは、芝生の上の真剣勝負の場、私はボールに走ってよっては次のプレーと汗だくになっていました。それを見ながら中先生は脇からプレッシャーをかけてはミスを誘うのでした。そう、そこはゴルフ場でした。

中先生の喜寿に寄せて

藤塚 久雄（54回生・元顧問教諭）

おめでとございませう。喜寿をお迎えになり、ますますご活躍の様子にただただ感服するばかりです。

中先生のサッカー界における業績は多大であり、語りつくせるものではありません。最新の業績は、県サッカー協会が1929年の設立以来の念願であった自前施設「神奈川県フットボールセンター」の2014年開設が今年4月に新聞発表となったというニュースに現れています。まさに中先生のご尽力の賜物と言えるでしょう。先生を囲む我々湘南OBも小さくガッツポーズ：：でした。そして、また何か新しいプロジェクトを始められているのではと楽しみがまた増えたような気持ちになっています。期待しています。

しかし、早いものですね。私も今年で52歳です。湘南入学以来36年間もご指導をいただいていることになりました。

「君、時というものは、それぞれの人間によって、それぞれの速さで走るものなのだよ。」とシエークスピアは『お気に召すまま』で語っています。分からない授業を受ける時は長いけど、サッカーに興ずる時は短い。つまらない人という時間は長いが、尊敬できる人という時間は短い。時間は、その人の気持によって流れ方が変わる



それからは、高校サッカーの会場でお会いすることが多くあり、県の代表をかけて桐蔭・桐光に負ける姿を多数見ていただいています。そんな私が何のご縁か、名門湘南高校へと赴任することとなり、選手権の出場を目指して、学力の高い選手と共にグラウンドで磨きあう日々を過ごすこととなりました。赴任が決まったときに、中先生からお手紙をいただきました。内容は、頭のいい生徒の教え方と注意点だったと思います。それを読み、これからの前途多難を考え、ひとまず不登校になることも考えましたが、これも人生の勉強かなと思ひ前向きに捉え取り組むこととしました。いざ指導してみると、中先生の言葉通り、集中力の高さと長期目標が持てることで3年生になってから、勝負できることに驚き、グラウンドの内外で高い志のある活動ができる集団になれると思わせられています。

そして、毎回の遠征・合宿に全て付き添ってくださり、湘南高校サッカー部の全国大会復帰に並々ならぬ闘志と情熱を注ぐ中先生の姿に、湘南サッカー部関係者の中で一番勝ちたいんだなと感じています。その姿を、監督と選手が越えていかなければならない高い壁と思い、また、越えた先に全国が待っていると思つて取り組もうと思つています。

磨いてこそ光るのが本物だと選手に伝えていくことが湘南高校の指導者の役目だと教えていただいています。

るものといったことでしょうか。先生と過ごしてきた36年は充実し、本当にあつという間だったように思えます。

高校時代、選手権を目指して就学旅行に参加しなかった我々のために春の遠征先を京都に設定してくださったことがありました。当時の遠征は静岡が定番でしたし、以降私が赴任中も春は静岡遠征を行っていました。先生の思いやりです。もちろん試合をすることが目的でしたが、半日の自由行動が与えられみんなで京都タワーに行つたことを思い出します。試合内容は忘れてしまいました。この遠征には故人となつてしまいましたが、山口先輩が同行してくださつたり、新幹線の中でピンクレディーを見にいたりといったこともありました。

教員となつてからは、昭和最後、平成最初の高校サッカー選手権に神奈川県代表として出場したことや、三県省道スポーツ交流韓国大会に先生が団長、私が監督で臨み「神奈川県優勝」を果たしたことなど先生との想い出は尽きることがありません。今、改めて振り返つて見ると、多くの出来事で先生のお世話になつたことを痛感させられます。先生には仲人までいただいています。

感謝の気持ちを持ちながらも、日常ではなかなかそれを伝えることが出来ませんが、この文集に寄稿させていただくことでよい機会をもらえました。ありがとございませう。

「今日という日は、残りの人生の最初の一日。」と、映画『アメリカン・ビューティー』の一節です。過去は、過去。昨日は、昨日。決して残りの人生というのではなく、今日から始まる中先生の、米

90周年記念祝賀会

(続・中メールNo.1 2010.1.1)

先ずは1月10日に行われる「90周年記念祝賀会」の盛会をお祈りします。

「記念誌・会報」を読ませていただき、古いOBの「湘南への想いとパワー」に感心すると同時に深く敬意を表したいと思えます。過去の輝かしい記録は正確に整理して今後の現役の活動のために生かさなければいけないと思います。

私が湘南に赴任して最初に教えた37回・牧村君の秋田国体・西ノ宮の全国大会の思い出。住金に行った、42回・関口君の「鹿島アントラーズ」創設の苦勞話。慶応大学の総監督として現在もチーム作りの41回・福井君の頑張り。親子で湘南のグラウンドで汗をかいた、46回・榎原君(旧姓阿部)54回・篠塚君・みんな素晴らしい話でした。未だ何人か書き落としてしまった方も居るようです(お許し下さい)。

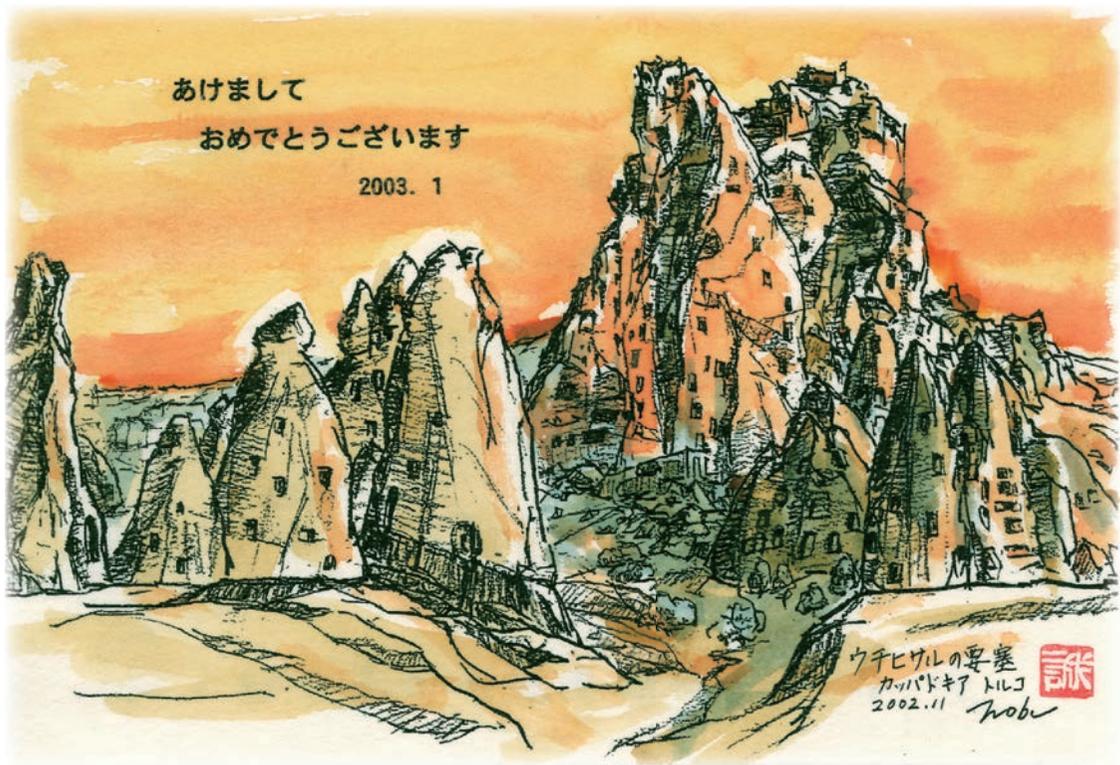
特に直接担当してきた幹事の、相羽(41回)浅倉(45回)関(48回)君、他の幹事の方には感謝とその努力に深く御礼申し上げます。そして次の100周年に向けて宜しくお願いしたいと思います(後10年、私も一緒に頑張るつもりです)。そこで何よりも大事な

事は「現役の活躍」です。グラウンドで応援する機会が多くなることを祈りたいと思います。

さて今回から「文章+絵画+作品(3~5)」としたのは、絵画(水彩画)を石の上にも3年、(約200作)描いてきて、少し上手くなったとOB諸兄に煽てられ、絵画作品も掲載してくれと言う話もあるので、その方向で掲載する事にしました。月に3~5点発表する事になりましたので、宜しくご笑覧下さい。

今月は正月につき、幾つか神社を載せてみました。暮れに描きに行った「三島神社」が何点かありますが、大変印象的でした。(三島か三嶋か?) 神主さんに説明を受けましたが、古くは(嶋)を使い「明治・大正・昭和の初期は(島)」になり、現在は正面大鳥居の横の石塔には大きく「三嶋神社」と書かれていました。

これからこのメールは、毎月・1日に掲載発表予定だが、本来アマチュアサッカー、特に高校、大学を中心に書いて行きたいと思っている。そして今年はワールドカップの年であり、この祭りも大会が終わるまでは楽しみである。今回は1勝出来るか? 私は次のブラジル大会への準備を期待している一人である。
6月まで話題は尽きないだろう。



参考作品 (倉岡先生) 2003年賀状 (カッパドキア・トルコ・ペン・水彩)

堆積した溶岩や火山灰が長い年月をかけて浸食できた奇岩群は圧巻。広大な岩層の中でひと際高い「ウチヒサルの要塞」は最も絵になるスポット。頂上でたなびくトルコ国旗が印象的。



三嶋神社 (樹齢600年の御神木のケヤキ)

東海道のスケッチで、松並木を追いかけて三島まで出かけた時美味しい自慢の「うなぎ」と、三嶋神社の御神木のケヤキの魅力にとりつかれ何時間も眺めた楽しいスケッチ旅行だった。

プロとアマの違い

(続・中メールNo.5 2010.5.1)

Jリーグも開幕、4月はサッカー・シーズンがスタートした。私が直接関係している、「関東社会人リーグ戦」(神奈川県教員クラブ)も開幕した。アマチュアサッカーのリーグ戦だが、頂点がJリーグ1部となりピラミット型の下に位置する。リーグ2部↓JFL(全国社会人リーグ)↓地域リーグ(関東・関西…)9地域1部・2部↓各県リーグ・1部・2部…

プロ、アマチュア・社会人・学生…全てがミックスされた日本サッカーの現状だが、私はこの組織のあり方に、問題ありと日頃から思っている。関東リーグ1部に「海上自衛隊、厚木マーカス」と言うチームがある。自衛隊のこのチームもJを目指す目的は無いと思う。同じように2部の教員チームはプロを目指しているわけではない。

此処でプロとアマチュアの違いをはっきりしておこう。プロのサッカーは飯の種にしたサッカーであるがそれはアマチュアのサッカーとは全くレベルの違う内容の中身で無ければならないと思う。残念ながら日本のプロサッカーはアマチュアとあまり差が無いように思えてならない。これは大変な事だと言える。

私が趣味として描いている「絵画」の世界はプロとアマチュアははっきりしていると感じる。いくら背伸びしても、道楽で描いている趣味の世界と、プロの世界は全く違うように思う。しかしヨーロッパ、南米のプロサッカーは明らかにアマとは違うように思えてならない。日本のプロがアマと大して違いが無いのが現実なのかもしれない。

このことは実は大変な問題だと思ふ、原因は沢山あるがトップのレベルが低いと言うことは、日本代表も世界レベルで無いということになる。先日行われた対セルビアとの代表チームの試合で日本は0対3で完敗を喫した。W杯前の大事な国際試合で無残な負け方だったが、これが現在の日本の現実だと強く感じている。



スペイン遠征宿舎(ビルバオ・ゴルリッツ)

第1回・3回の遠征で宿泊したビルバオの別荘地プレンシア、カンタベリヤの海の見える国民宿舎(ゴルリッチ)で絵になる景色を描いたのが初めての外国での思い出のスケッチだった。



茅ヶ崎球場から見た富士山

茅ヶ崎の海岸から見た富士山も美しいがこの野球場のある高台から見た富士山は私の好きなアングルである。松林と民家の屋根の上にあるどっしりとした姿は描いていても楽しい。ここに来て深呼吸をすると長生き出来る様な気持ちになる。

ふたたび90周年について

(続・中メールNo.3 2010.3.1)

先月号に「湘南サッカー部90周年記念」について、報告したが、もう少し詳しく私の感想を加えて報告してみたい。それは90年の長きに渡って、それなりに活躍している高校は日本国中見渡しても、そんなに多くは無いはずだ。戦前の一時期、戦後の何年間、名前が出て来るが、戦前、戦後、現在、名前が出てくる公立高校はそう沢山はないだろう。

戦前の神戸一中、戦後の神戸高校、広島一中、国泰寺高校、浦和中学、浦和高校、志太中学、藤枝東高校、葦崎中学、葦崎高校、等々名前が出て来るが、戦後の帝京、国見、浦和南、最近活躍したサッカーの有名校等々。その中に湘南高校という名前が僅かにでて来るが、長い歴史の中で脈々と続いている輝かしい記録は(特に県立高校で)、日本の高校の中でも胸をはれる記録だと自負している。

90年の自分達の記録をもう一度眺めてみると、戦前戦後を通じて、関東大会17回出場(旧制中学時代8回・新制高校9回)、優勝3回(戦前2回・戦後1回)、国体神奈川代表8回(戦前4回・戦後4回)、優勝、1回、昭和45年以降は神奈川選抜として出場。全国高校選手権大会神奈川代表6回(戦前3回・戦後3回)と長年に渡って顔を出している記録は素晴らしい事だと思う。是非現役が全国へ7回目の出場を期待したい。



赤木園・校舎正面

新校舎が出来てから正面に初代赤木校長の銅像を中心の庭園がある。最近は何か大事なニュースはこの庭園の上に垂れ幕で世間に発表する。今回はノーベル賞受賞の「根岸さん」とフェンシングWU(ワールドユース)出場の「花田さん」であったが、サッカー部全国大会出場は何時になるやら？



校門の古木(樹齢・百年の楠木)

湘南のシンボルとも言えるこの楠木は一時枯れてしまう心配があったが、色々手を尽くし長生きしている。何回かこの古木の様子を描いているが、本当に歴史の重みを感じる素晴らしい雰囲気である。



三ツ沢サッカー場(ニッパツ競技場)

何故この作品を描いたのか深い理由がある。先日亡くなられた横浜サッカー協会の古い役員の方の追悼の思い出を語る会が、11月3日にあった。彼とのご縁は特に親しい間柄でもないが、東京オリンピック以来のお付き合いである。それもこの絵「三ツ沢競技場」を通じての付き合いで、思い出は50年分の話になり、その気持ちを作品に託して霊前に捧げた。

ワールドカップ雑感

(続・中メメルNo.6 2010.6.1)

いよいよW杯が始まる。1998年フランス・ツールーズで君が代を歌った感激。そして2002年日本開催・横浜国際競技場(現日産スタジアム)で対ロシア戦の勝利の瞬間、多くの人と手を取り合つての喜び。さらに仙台競技場の試合でトルコに敗れた時の悔し涙。2006ドイツの町で胸を張って歩いた「鈴木中、W杯観戦ツアー」楽しかった思い出。

定年退職後このW杯3大会と2000年ユーロ、ベルギー・オランダ共催大会、2004年、ポルトガル、スペイン、共催大会、準決勝2試合観戦、これは凄い試合だった。私のサッカー人生の中でこの経験は何よりも素晴らしい思い出になるだろう。そんな貴重な経験を持ちながら、今回の南アフリカ大会へ足が向かないのは何故だろうか？

先日NHK衛星放送で戦後50年のサッカー界の流れを放映していた。正に私のサッカー人生そのものだった。日本代表のトップ選手ではなかったが、その裏方の指導者として彼ら(長沼・平木・岡野・八重樫)を支えてきたと言う気持と、クラマーさんの指導を受けた人間として、今日の日本サッカーの隆盛を喜ぶと同時に、心配をしている一人である。

2010岡田ジャパンのメンバーが発表になった。予選リーグ

を勝ちあがるのは不可能と見るのが正解かもしれないが、負けるにしても負け方がある。カメルーン、オランダ、デンマーク、どのチームにも勝てる要素は無いかも知れない。日本人の特性は？私には見当たらない。しかし運動量、イマジネーションは負けなしいと言えるチームであって欲しい。



2006 ドイツ W 杯



浜降祭(海の日)

茅ヶ崎市自慢のこの祭りは「海の日」になった。勇壮なみこしを担いで茅ヶ崎の海に入る様子を描くつもりが、この景色だけになってしまった。朝早くから御輿を担ぎ「本村御輿」も間もなく「八王子神社」に到着する。担ぎ手の背中姿は何となく絵になる



大岡越前祭り(4月17・18日)

御輿を担ぐ姿は何となくユーモアがあり纏を振る姿は絵になるが、人の動きを描くのは未だ10年早いようだ・・・それにしても日本人はお祭りが大好きだ。

日本サッカーの行方

(続)中メールNo.13 2011.1.1

あけましておめでとう御座います。今年もよろしく願いました。この紙面をお借りして年頭のご挨拶とさせていただきます。既に古希を過ぎてからは、年賀状は失礼させていただいておりません。長年役員として通った三ツ沢サッカー場が、「ニッパツ・・・」と名前が後援企業名に変わりましたが、この会場でサッカー関係者には新年のご挨拶をさせていただいております。

天皇杯は清水エスパルス対鹿島アントラーズのJ1同士の決勝対決になりましたが、何かもう一つ魅力に欠ける試合になりそうです。原因は何処にあるのでしょうか？日本の観衆も目が肥えてきて、毎週のようにTV観戦出来る、プレミア、セリエA、リーグ、ブンデスリーグ、等と比べてJリーグの人氣が落ち込んできているのではないかと心配をしています。

続いて大学日本一も新年になって決まりますが、私の母校(筑波大学)がベスト4で敗れ、中京大学と関西大学の決勝戦になりましたが。悔しいけれど、大変良い結果だと思います。地方大学の台頭は日本サッカー界の中で学校教育がサッカーの原点だと、兼ねてから言い続けています。

選手達は、名門校(鹿実・国見・東福岡・藤枝東・清水東・星稜・桐光・等の卒業生)そして大学生(明治・筑波・学芸・法政・大学の現役)でフレッシュだった。

先月の中メールの絵画作品に「湘南の卒業生・ノーベル化学賞根岸英一さんの垂れ幕」を掲載した。その隣に「フェンシング・Jrワールドカップ出場の和田花子さんの垂れ幕」を載せたところ、この反響が凄かった。世界大会と言うのは私達が想像をするものとは世界が違うワールドクラスのレベルの話で、高校生としては見事な結果だと言えよう。

想像だけの話を書くのは失礼なので、その道の専門家に聞いたところ、正にその通りで、それは想像以上の素晴らしい大会のようだった。此処で私が言いたいのは、昔は良く使われた「文武両道」と言う言葉が、湘南高校で現実の問題として語れるような時代が、又来つつあるということ。秘かにそう期待している一人の年寄りの気持ちを伝えたい。

先日卒業生(54回M君)の関係で、「名古屋」にある業界の管理職対象の講演会を依頼され「サッカーの組織論」と言う話をしてきた。その時に私のプロフィール紹介に「元湘南高校教諭・神奈川県サッカー協会名誉会長」と書かれ、野球の甲子園の優勝サッカーの全国優勝と6回の全国大会出場が紹介されていた。そして平成19年から神奈川県学力向上進学重点校に指定されると書



特に大学でサッカーの指導者を育てる事が出来なければ駄目だと思います。大学サッカーは優秀な指導者育成の場にならなければいけない。昭和の初期に加納治五郎先生が東京高師体育学部長として全国に優秀な体育教師を送り出した経緯があります。この事をもっと真剣に考える時です。

日本のサッカーを考える会を暮れに持つ機会がありました。県の古いサッカー仲間、日本サッカーを考える会として激論を交わしました。結論はもっと良いサッカーの指導者を育てる事が第一に挙げられました。良い指導者とは、人間として優れた人材で、本人も一流の選手で無ければなりません。そして誰よりも何よりもサッカーが好きであること。

何回か書いてきましたが、良い指導者の条件は「1」サッカーが好きであること、「2」説得力があること(技術で見本が見せられる事)「3」人間として魅力のあること、「4」教育者である事、大変難しい要求ですが、期待しましょう。

「アジアカップ優勝の感想」(ザックJAPAN)

此処で少し感想を書くなら、世界に類を見ない、100年の学校スポーツの歴史の上にある日本のプロサッカーが監督には非常にやりやすい環境だったと言えるだろう。しっかりと教育された

かれてあった。

韓国の放送局が「湘南高校」の取材に来たらしい。韓国ではこのような学校はないようで、ノーベル賞学者が出るような学校のグラウンドで、サッカーや野球を本格的にやっているのは不思議な光景に写つたらしい。韓国では体育の専門コースをおいてサッカーを強化する方法をとっているようで、日本もこれから国の予算で強くなる高校が増えてくるだろう。





サイクルロードから江ノ島

このアングルは何回も描いた「江ノ島」だがサイクルロードの左側の植木と海と江ノ島をひとつにまとめるのは、かなり無理があるがそれが「絵描き」の楽しみである。卒業生S君の「ファンボルト賞」？のお祝いに・・・



江ノ島（ヨットにて南側から）

日頃見ることのない南側外洋から見る「江ノ島」は何とも言えないアングルである。ヨットは揺れるのでゆっくりスケッチできないが、写真と脳裏に焼きついた景色を描くのは本当に贅沢な遊びだと強く感じた・42回OB湯浅君・感謝。



熱田神宮御神木

上記の作品と同じく懐かしい思い出の「熱田神宮」の御神木は樹齢1000年とも言われる「大楠」は見事だった。この作品を家で仕上げた時に「東日本大震災」があり、不思議な作品となり、復興を祈った。



名古屋城

54回・卒業生M君の依頼で名古屋でサッカーの講演会を頼まれた時の作品。何年かぶりの名古屋城は美しく輝いていた。木立の間から見える天守閣は「絵」になる姿だった。自己満足の出来る作品だったので、ある展覧会に出品した。

2010シーズン

(続・中メールNo.15 2011.3.1)

今回は2010シーズンのまとめをしてみたい。先ず日本代表チームが大変良い結果を残した事は、サッカー界にとってもまた日本のスポーツ界にとっても大変良い結果だった事を心から喜びたい。先の南アフリカワールドカップで岡田ジャパンが予選リーグで格上のカメルーンに1対0、デンマークに3対1で勝利しリーグを突破し16に残った快拳がある。

戦前の予想を覆し世界のベスト16に入った事は凄い事であった。1998年フランスで初めての本大会出場で予選敗退、2002年の日韓地元開催は16に入ったが、2006年ドイツ開催では予選を突破できず、期待して現地へ応援に出掛けたが、残念ながらやはり駄目かと肩を落として帰国した苦い経験があり、今回の結果は快拳と言ってよいだろう。

一方国内の結果はJリーグの優勝が名古屋グランパス、天皇杯は鹿島アントラーズでプロリーグが安定したと見てよいだろう。

他方アマチュアであるがそれぞれ社会人・大学・U-18・高校・中学・少年・女子・シニアと都道府県協会傘下のピラミットの土台はしっかりと力をつけて大会が開催されてきた。全ては書き尽

くせないが少しまとめておきたい。

先ず大学であるが地方大学が力を付けてきたと言えるだろう。1月に行われた第59回全国大学選手権大会の決勝戦が、関西大学2対1中京大学で関東のチームが残れなかった現実をどう分析すればよいのだろう。又19回女子の大学は早稲田大学が3年連続優勝し、このことも原因は何処にあるのか探っておきたい。

さて高校年代のサッカーのU-18高円宮杯は優勝がS F 広島2位・F C 東京、3位静岡学園高校であった。実力はJユースが上だったように思う。第89回高校選手権大会は今年も初優勝になるが滝川二高(兵庫)5対3久御山(京都)であった。ここ数年初優勝が続いている。88回・山梨学院、87回・広島皆実、86回・流経大柏、85回・盛岡商業であった。

さてシーズンの最後を飾ったアジアカップはザッケローニ監督の采配が当たり見事な優勝であった。準決勝で韓国にPKで勝ち、決勝戦オーストラリアに延長1対0での優勝は未だ記憶に新しいが、長友の左からのセンターリングを右の李の左足ボレーのダイレクトシュートは見事であった。全てが上手く展開した監督は満足のいく大会だったと思う。



鎌倉円覚寺山門

初めて描いた山門から見える中のアングルが楽しくスケッチ出来た。門のうち枠に見える、緑の木立に囲まれた道が奥の本殿に続く景色が美しかった。暗い山門の奥に開ける太陽の光の明るさが印象的だった。



大雄山最乗寺山門

薄暗い立派な山門の向こうに見える道が「奥の院」に続いている。8合目まで来て、頂上まであと20%と言う杉の大木の間を抜けてゆく景色が「希望の道」と言えそうなアングルで私の好きなモチーフである。

あけましておめでとう御座います。今年もよろしくお願いいたします。この紙面をお借りして年頭のご挨拶今年の夏は天候不順、地震、台風、大雨、土砂崩れ、水害、等々、あまり良いニュースが無い。暑い暑さの中で行われている夏の高校野球は明るくて、見ていて楽しい。TVの中で懐かしい場面が映し出され、池田高校、PL学園、浪商、早実、等の優勝場面、オールドファンは喜んでいいる。朝日新聞後援、NHK放映、なんと言っても夏の日本一の娯楽だ。

それに対抗したのか、サッカーの高校選手権は冬に行われ、毎日新聞と民放TV局の放映。こちらも正月休みの娯楽としては最高だ。指導者の懐かしい顔が浮かんでくる。藤枝東(故長池)習志野(西堂)浦和南(松本)帝京(小沼)、国見(小峯)、鹿児島実(松沢)等々一緒に飲んでサッカーを語った仲間だった。相変わらず皆さん今も元気の様子だ。

この夏は湘南のグラウンドにあまり足が向かない。理由は簡単、あの「体育祭」の準備をしているクレージーな生徒達の(髪を染めて踊っている)姿を見るのがいやだからだ。自分達が半世紀も

父鈴木幾雄 落語家柳家小さん師匠

私の父は、東京高師(現筑波大学)卒業後日本の学校剣道界の中心的立場で活躍してきた。関東の小天狗と呼ばれ実力NO1の剣士だと言われ、60歳の時東西対抗戦の東軍の大将として闘ったのが私の記憶に残っている。自分では勤務先の中学校・池袋の近くに幼稚園のホールを借り「中心館」と言う道場を開き、戦後の物も無い時から町の子供達を対象に剣道を教えていた。その頃道場に通っていたのが若き日の「落語家の小さん師匠」であった。私も中学生で時々顔を出した事もあり、その後も師匠にお会いすると「坊ちゃん」と呼ばれていた。

その後湘南高校で講演をお願いした時快く来て頂いたこともあった。さらに海老名高校で校長の時、PTA・生徒対象の講演の候補者を落語家に絞り、職員会議で相談している時私が提案したら職員の皆さんが「あの有名な落語家が来てくれるはずがない」と信じられない顔をしたのが忘れられない。当日生徒、職員、保護者の前で、校長を捕まえて「坊ちゃん」を連発するので最初から爆笑の会場の雰囲気盛り上がった、話術の名人が懐かしい

余談になるが私が座っているテーブルの向こうで、この冊子の原稿を校正してくれている老妻も、何十年か前この池袋の道場に



前に「仮装行列」を、「体育祭の仮装」と言うマスゲームに変えてきて、今日のようになったのだから私の責任の様な気もするの
で余計足が遠のいてしまっ。

同じように半世紀も前から実施されている「縄跳び」「湘南体操」「持久走」「水泳」等体育科の授業で行われているものは、何時見ても嬉しく心に響いてくる。「縄跳び」と言う単純な種目も、一重、二重、三重、飛び、前で交差、横で交差(サイド・クロス)、斜めで交差、旋回、左右に旋回、秋から冬にかけて見かける、懐かしい景色である。この縄跳びが広島の学校でもかなり行われていると言う話を聞いた。その原因は何回かこの中に素敵な水彩画の掲載をお願いしている倉岡氏が湘南から広島県へ転勤した時に持って行き、普及発展したと言いききさつがある。

1960〜80年代、学校行事の中に「文化講演会」と言う、各界の名士を呼んで講演を全校生徒が聞く非常に生徒達にとっては人気のある行事だった。たまたま私が生徒会の担当だった時に、私の父の関係で落語家の故柳家小さん師匠をお願いをして、話を聞いた懐かしい思い出がある。今は昔話になってしまいが、色々な学校行事がそれなりに充実し、只勉強ばかりでなく、部活動も学校行事も神奈川県一、日本一、を自負して胸を張っていたような気がする。今でも、そう言う学校であって欲しいと願いながらグラウンドに顔を出したい。

女性剣士として通っていた事を付け加えておこう。

「次ページ写真説明」

「中和」NO.62 この書は父が好んで使った言葉で、多分中国の古い文献にある「物事は中位が良い」即ちええ加減が良いと言うことらしい。息子の次男の名前を中(ただし)三男を和(やまと)と命名して満足していた。

「剣道の構え」NO.61・63 父の剣道は「自然体」の構えを重要視してリラックスした姿勢を常に心がけ、足のさばき、「送り足」「より」「歩み足」を常に研究していた。剣道の動きも他のスポーツの軽いフットワークが大事だと言っていたことを思い出す。

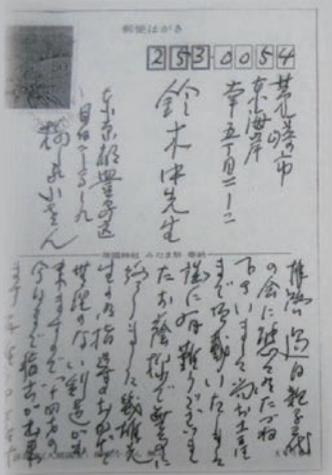
「小さん師匠の記念の扇子」NO.64 平成7年私が海老名高校校長のとき講演に来られ、お土産として戴いた「芸の道50年記念」につくられたものだ

「記念の色紙」NO.65 湘南高校で講演の後「江ノ島」で食事をした時さらりと筆を出して書いてくれた「色紙」私も何時になったら画けるか?(我が家のお宝にしている)

「礼状」NO.66 茅ヶ崎の公会堂で「小さん一門」の落語会があり、楽屋に陣中見舞いに行った時の「丁寧な礼状」を大事に残してあった。



No.64 柳家小さん師匠・お返しの扇子
大事に我が家に残された「大・小・対」の「小さん師匠」からの「お返しの扇子」である。何かの賞を戴いたときのものだと思うが、多分「芸の道 50 年・記念？」だったと思う。



No.66 柳家小さん師匠・直筆・礼状葉書
「無心」と書かれた高僧？多分己だと思
う・・・さっと描いた、筆書きの礼状・・・
大事に我が家に残してある。何時の日
か私も直筆で描ける日を願いながら「絵
筆」を動かしているが・・・名人の域
に達するのは？いつのことやら・・・



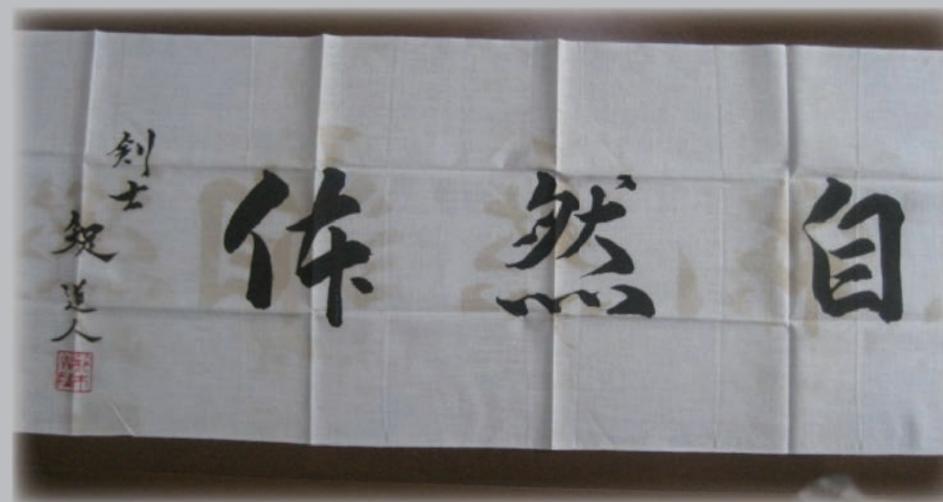
No.65 柳家小さん師匠・直筆色紙
湘南高校に講演に来られた帰りに、「江ノ島洗心亭」で食事をした帰りに、色紙に
さっと描かれた「しばらく」のためき(己)の絵。名人芸に感心した懐かしい
思い出がある。



No.62 鈴木幾雄・直筆「中和」
父鈴木幾雄はこの「中・和」と言う文字を好ん
で使っていた。古来中国の高僧の文章の中の文
字であるが、本人から説明を聞いた記憶はない
が、私の名前に「中」弟に「和」を命名したの
はよほどのこだわりがあったのだろう。



No.61 鈴木幾雄・剣道雑誌・写真
剣道の雑誌の中に「剣風を探る」と言う紹介があった時の写真である。父の剣風は
私には解らないが只研究熱心だったことは伺える。父の剣道の足裁きについて議論
をしたことがあるがサッカーに通じるフットワークと「歩み足」を晩年は強く打ち
出していた。



No.63 自然体（直筆の日本手ぬぐい）
この「自然体」は父が強調していた、構えであり、動きであり、受身であり、心の問題であったように、最近になっ
て解ってきたが、サッカーに通じる対敵動作の基本も「自然体」でなければボールは奪えないと思う、懐かしい「日
本手ぬぐい」である。

舌切り雀のたわごと

(平成3年2月〜8年(1991年)) No.20

突然出来た口の中のポリープ・手術の経過

表記の一文(ワープロで書かれた・たわごと)に縷々細かい経緯が書いているが「舌腫瘍切除」が正式の病名である。良性とも悪性とも正式には言われなかったので未だに「舌癌」と言う言葉はあえて使っていない。只1回目の入院で完治せず2年後に再入院し外科的手術で全ての腫瘍を取り除く事ができた。

1回目、(平成元年9月)人間ドックで発見された最初の経緯、北里病院への通院簡単な舌の表面の切除と放射線照射(最大26回)これが原因で歯が全て駄目になってしまった。(平成2年通院検査)

2回目、(平成3年1月)再入院手術、全身麻酔で舌を四分の一程切除?それはそれは痛かった、つらかった。閻魔様(エンマ様)に舌を抜かれた夢を見た…と記している。

さてその後の事は、高校教頭・病氣・高校校長・退職、神奈川県サッカー協会・理事長・会長・この辺の事を書いている。かなりの文章になるので、項目だけを紹介しておこう

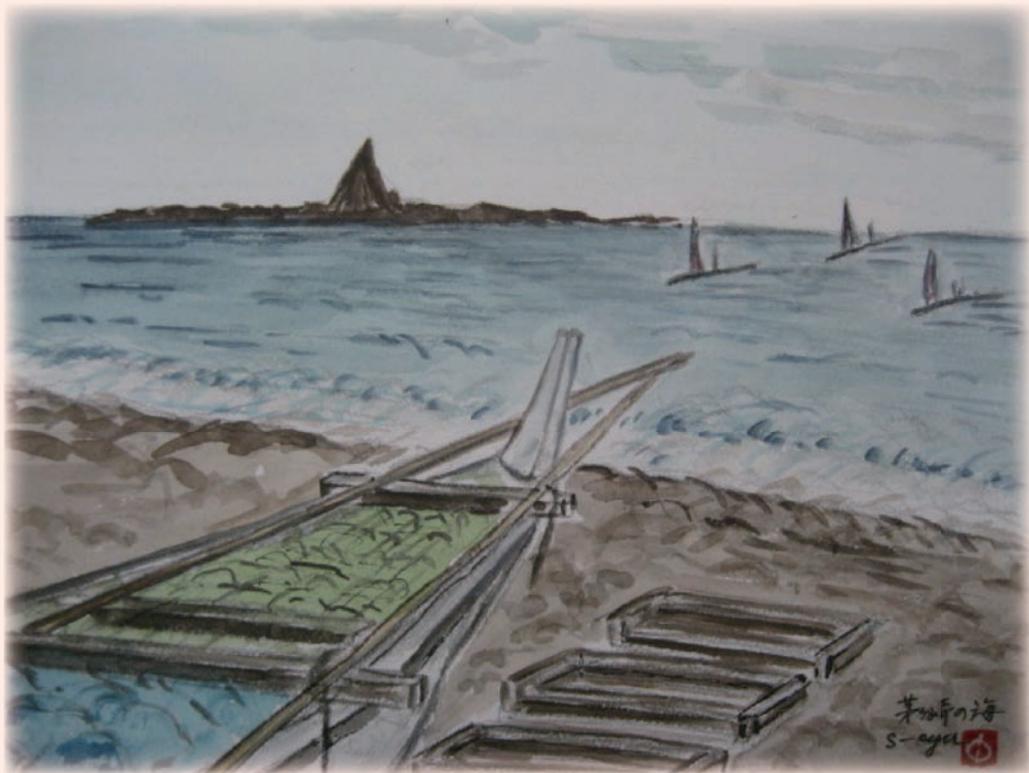
○描く事・書く事(手術後・病室でこの時から始める気になった)
○教頭の仕事(ぼやき) ○アイデンティティ ○校長雑感(校長を楽しもう)

○快老を目指して(良い老人の条件) ○意地悪爺さん ○アバウトな人生 ○本物を見る目 ○Jリーグの開幕に思う ○最後の住処(湘南地区を希望) ○ガンさんの残したもの(放語録・体験・自由・規律主義・一刀両断…) ○勝負と言うこと ○いい加減な人生(中・和) ○還暦に思う

その後は約10年「中メール」に書いてきたが、いよいよ最後の老人の心境は何を書こうか目下思案中である。

○中爺のボヤキ、たわごと、歯軋り、寝言、つぶやき、歯なしの(嘶) タイトルを何にするか、楽しみにして欲しい。今度は本物の「快老の条件」を書きたいと思っているが、どうやら「歯なしの爺」のぼやきになりそうだ。

「舌切り雀」で随分と苦労してきた。スペインで親しくしているサッカー好きの親父さんに、「舌を切って、何も出来なくなった」と言う話をしたら「下を切って、・・が出来なくなった」と言う理解で、シモネタのジョークは世界共通だということが解った。今度は「歯なしの話」はどんなジョークが飛び出すか、今から楽しみにしている。冗談抜きで「総入れ歯の人生」どうなることやら、なるようにしかならない、今のところ「ケセラセラ」の心境である。2012年は「喜寿」を迎えるので休養してゆっくりと1年間書き溜め、2013年に新たな出発をしたいと思っている。
〴〵〴〵〴〵期待 である。



茅ヶ崎海岸から烏帽子岩

私のスケッチは茅ヶ崎の海岸からのものが多い、中でもこの漁船とヨットと烏帽子岩・のアンクルは湘南の海の象徴で夢があり、色々の思い出の詰まった景色で、美しく見えて描いたものが何作もある。



クイーンの塔(横浜税関)(三塔物語り完成)

2011・11・3日(76歳の誕生日)に我が家の家族全員でお祝いをしてくれた帰りに横浜駅から船で赤レンガへ向かった。そのときのスケッチこれで三塔が完成何かほっとしたのと、これからもう少し本気で描こうと言う気持ちが湧いて来た。

人とのつながり・家族・友人・教え子・

これが最終原稿になるかも知れない「中メール50回・続中メール50回・続々中メール24回」10年間書いてきたが、これで終わりたい。私が高の人より恵まれていたのは、素晴らしい家族のことは言葉に言い表せない。ここではカットするが、良い友人と良い教え子に恵まれていたことは胸を張って言えると思ってる。

子供時代(小中学校の仲間)「2期会」ニクラスの小、中、学校9年間(昭和16年〜25年)の同期の仲間、高校3年間「多磨一会」大学4年間サッカー仲間、教員時代の体育の職場の仲間、サッカー協会の仲間・現在のスポーツクラブの仲間・そして28年間の湘南高校サッカー部の教え子、何回かクラス担任として接した生徒とのつながり等を考えたとき何百人になるだろうか？

そんな人と人との強い絆に支えられて今日の自分があるのだと思う時、77年の人生を振り返ってみて、戦争経験がやはり多感な少年時代の大きな記録として残ってくる。そしてサッカーと言うスポーツを通して接してきた人間関係が大きな柱となって支えてくれている。そんな感謝の気持ちを込めて描いてきた粗末な作品

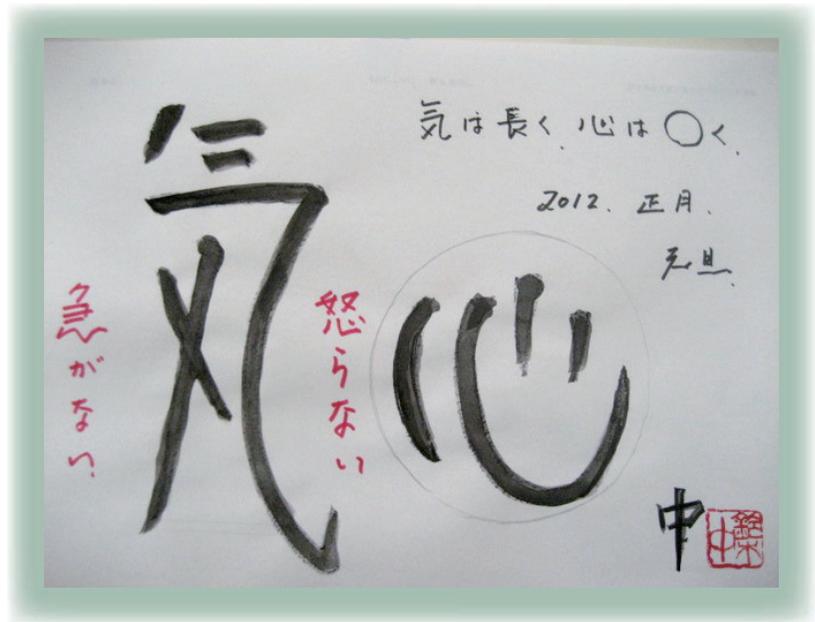
(中メールと水彩画)だが皆さんに理解してもらえれば本当に嬉し。

体力は衰えてきたが、気力はまだまだ衰えていない。幸いに時間は充分にある。最近強く感じているが、「心は〇く・気は長く」。怒らない、急がない、何事も時間をかけてゆつくりと腹を立てずに、すべて和やかに対応しようと心がけている。時間があると言うことは本当に幸せな事なのだ、しみじみと慌て者、せっかちの性を反省している。

と言う理由でこれから約半年かけて「中メール&ギャラリー」と言うタイトルで文章と画集を作り上げたいと思っている。期待に添えるものが出来るかどうか不安だが、多くの仲間からもコメントを頂き内容の濃い作品にしたいと思っている。紙面に限りがあるので失礼してしまうかもしれませんがその時はお許し下さい。

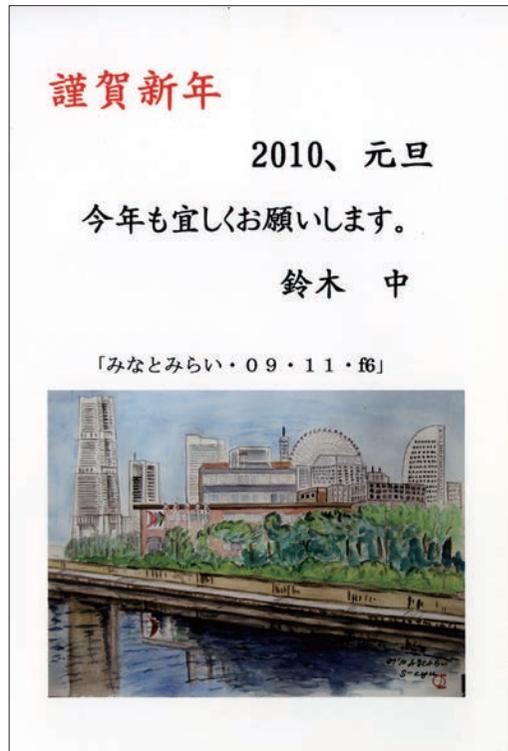
最後になりますが湘南高校の現役と保護者には全員に声を掛けることもなく失礼な事もあったと思うがお許し願いたい。苦しい3年間だった卒業生は今後も忘れずに湘南で培われた精神を大学で社会人として生かしてください。そして現役諸君は必ずや、神奈川県を制することを信じて、日本一の練習をしてもらいたい。

私も体力が続く限りグラウンドに足を運びたいと思っている。そしてこの冊子が出る頃には「湘南高校健在なり」と全国に、いや世界の同窓生に見せて欲しいと願っている。

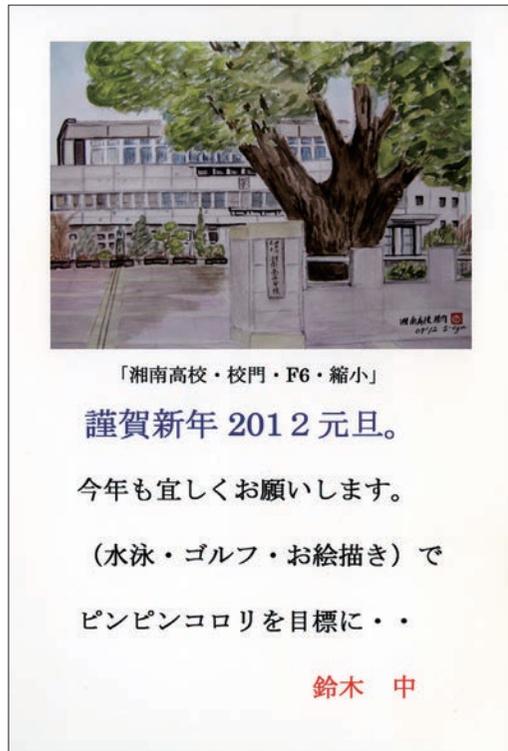


気は長く・心は丸く

高貴高齢者と言われるようになると確かに体力は衰えてくる。しかし気力まで衰えない為には「気は長く(急がない)、心は丸く(怒らない)」をモットーにして、何事もんびりと対応するように心掛けたい。(2012年元旦の目標)



2010年賀状



2012年賀状

現役情報

中さんのメモ帳(2012.1.22) No.22

昨年の暮れ「中メール」をしばらく止めると言うことを発表したら、沢山の方から止めないでくれと言う反響をいただいた。お世辞と激励の言葉だと素直に受け止めて、新年から何を書こうかと迷っていたが、取り敢えず「現役情報」を中心に「中さんのメモ帳」を不定期ではあるが書こうかと思っている。現役はしばらく公式戦がないので、この1月はじっくりと腰を落ち着けて毎日の練習と休日は練習試合を消化してきた。幸い少し力がついてきたと言う評判で、強いチームからゲームの申し込みを受けて、毎週土日はグラウンドに足を運ぶのが楽しみになって来た。

神奈川県の高校サッカーの現状を古いOBは知らないと思うので少し触れておこう。学校体育として高体連が主催する大会は「夏の高校総体・冬の選手権大会・関東大会・新人大会」がある。サッカー協会と共催の大会が「高円宮杯U-18サッカーリーグ」である。このトップは関東リーグで高校は「桐光・桐蔭」県内リーグは「KS」8、K1、A、B「16」、K2、A、B、C、D「32」、K3、(A～Q)「約150」でそれぞれがリーグ戦を行っている。湘南はリーグ戦をK2リーグで戦いトップチームは高体連の大会を戦っている(細かい事は県協会のHP参照)さて暮れの冬休みから1月の練習試合であるが結果だけ報告しよう。

サザンビーチ

中さんのメモ帳(2012.3.4) No.23

「スケッチと現役情報(卒業生)」

冬の湘南の海は何となくうら寂しいが、暖かい日のスケッチが



サザンビーチ

茅ヶ崎海岸にある(幸福の輪)、このリングの空間に二人で立って輪をつなげば幸せを呼ぶリングだそうだ。この中に遠くに見える江ノ島と三浦半島は美しい。冬の何も無い景色にこのスケッチは楽しいアングルだ。



う。対駒沢(東京)0対4、対山崎(東京)1対2、対正智深谷(埼玉)1対2、対北陵0対1、対武相0対3、対日大日吉0対1、対松陽0対3、対日大藤沢0対0、対淵野辺1対2、対相洋中止と負けていない事は高く評価できる。戦い方はシステムとしては4・4・2で正確なショートパスからスルーパスを狙い、崩してゆく現代流(昔から変っていない)サッカーだが、イマイチ技術の未熟さ、体のバランス不足、90分走りきる体力、シュート力不足が目立つが、見ていて楽しみなチームである。

今年の冬の選手権大会の決勝は市立船橋2対1四日市中央の試合が4万人を越える大観衆の前で、大変面白い結果で終了した。常連校と言われて来た、帝京、国見、鹿児島実業、藤枝東、葦崎、等の名前が聞かれなくなったが、そのような学校より上記U-18で戦う新興の学校が出てきたので日本国内の高校生のサッカー分布が変わって来たといえる。上記決勝に残った2校のほか、青森山田、中京大中京、桐生第一、静岡学園、清水商、尚志、等の名前が出てくるのは、やはり高円宮杯で鍛えられた学校がこれからも活躍するであろう。しかしそういう状況で、湘南高校が対等に戦い「サッカーの醍醐味・奥の深さ」を是非見せて欲しいと願いながら、寒い湘南のグラウンドでサッカーを観て楽しんでいる。

私は大好きだ。

空気が美味しい。深呼吸をしながら陽だまりでポーと海を眺めていると長生きできそうな気がする。はるかに見える江ノ島の姿を見ているとこの半世紀の湘南との付き合いが次から次へと思いつかんてくる。

多くの卒業生達、みんな素晴らしい生徒ばかりだった。私がこのように長生きしているのも、みんな彼らのお陰かもしれない。しかし多くの若者達が私より先に逝ってしまった。湘南の海を眺めていると亡くなった一人ひとりの顔が浮かんでくる。湘南の海は私の人生の全てを包んでくれているような気がする。

さて湘南高校サッカー部はこの春「20名の卒業生(選手18マネージャー2)」が巣立ってゆく(87回生)になる。最後の10月の高校選手権大会予選まで全員活動したと聞いている。卒業生との送別試合を3月3日に行った。全員の顔と名前が一致しないが「本当に良くやった、ご苦労さん」と言って送り出したい。私の「メモ帳」にある合宿の事、波崎、菅平・時のスミカ?八千代高校あの練習試合・そして桐蔭との夏の大会に1対0で敗れた試合の事、最後の冬の選手権大会で、向上高2対0で敗れた試合、がメモされてあった。

送別の辞にデットマル・クラマーさんの言葉を送った。

「サッカーは子供を大人にする、大人を紳士にする」

大学へ合格した人、駄目だった人、決して後悔はしないと身勝手な私は思っている。これからの人生に必ずや役立つ事を確信している。

「中」兄との関係と感謝の言葉

鈴木 宝（実弟）

小生は「中」の弟で13歳年下の宝です。一回り以上歳が離れているので子供の頃は余り兄弟と言う感覚はありませんでした。なにせ幼稚園の子供を手を引いて歩いていたおじさんだった訳ですから。兄が湘南高校へ赴任した頃は小生は小学生で湘南高校のプールに泳ぎに泊まりがけできました。あの冷たいプールの水の感覚を今でも覚えています。湘南高校最後の年にサッカー全国大会に家族で三ツ沢サッカー場に応援に行った思い出もあります。兄はサッカーをしていましたが、小生は父が剣道師範と言う環境だった為剣道を小学4年生から初めて高校生まで巢鴨学園で活躍しました。その後10年間余り中断してしまいました。その間、兄には仕事の世話をして貰ったり、病気になった時には他の兄とは違ってただ一人色々な面で世話をしてくれました。それと又小生が40歳を過ぎて今度は息子の大学の進学や就職についても何かと相談に乗って貰いました。お蔭で長男は現在小学

校教諭として勤務しています。小生もまた、息子もこのように兄に世話になりました。

そして又、兄嫁の渥子姉とは剣道繋がり、姉も大学時代剣道を父から指導を受けていたころ小生も小学生と一緒に剣道をしていましたので兄よりも以前に姉とは知り合いました。そんな訳で兄の家に行くのはとても楽しく歓迎して貰えるので休みごとに中家へ良く行きました。今の小生は剣道を復活させ現在剣道教室を主宰して幼児から高齢者まで指導しています。この2月には兄と父の33回忌をできたことは本当に喜びです。

兄には、小生何もすることはできませんが、兄は小生の生活の中でことごとく世話をしてくれました。本当に有難く、感謝、感謝の気持ちでいっぱいです。いつまでも元気でサッカーに興味の絵画に楽しい生活を送って下さい。（剣道教士七段）

安堵、ほっとしております

鈴木渥子（妻）

先ず、無事に元気に喜寿をお迎えになられた事を、共に生活してきた者として心からお祝いを申

し上げます。そして、ほっとしております。25年

前、教頭時代に舌腫瘍の手術を受け、その後の食生活は歯の関係もあり、思うような飲食はし難い状態が続いて居ますね。でも、これまで元気に過ごしてこられたのは、毎日欠かすことの無い「百薬の長」と言われるお酒のお陰だったのでしょうか。思い返せば我々も結婚50年とか。よくぞ性格も趣味も全く違う二人がここまでやってこられたなあ と思います。これも貴方サマの广いお心のお蔭さまなのでしょね。唯一!?の共通点は、二人とも運動する事が好き…ということでしょうか。今はお互いにスポーツクラブで水泳を楽しんでおり、このことが夕食時の共通の話題にもなりますね。

貴方サマには本当に素晴らしい教え子、友人、そして仲間が沢山いてくださいます。

本当にありがたいことです。どうぞこれからも皆さまと共に、そして皆さまのお荷物にならないように、お健やかに過ごしてくださいませ。見守らせていただきます。

看板

鈴木 理（長男）

高校入学とともに寮生活を始めて以来、実家を離れて暮らしてきた私には、鈴木中という人物が、ふつつの感覚で言う「父」とは別のかたちで、つまり、よそ様が当人のことを呼び慣らわすようなかたちで姿を現す機会が多くあったように思われます。それは私が、竹刀を握ったりボールを蹴ったりする方々から「幾雄先生のお孫さん」とか「チュウさんの息子」と呼ばれたり、大学の先輩方から「茗溪三世」と呼ばれたり、さらには学校関係の方々から「三世代体育教師」と呼ばれたりする場面において顕著でした。どうやら私は、何やら色々な「看板」に取り囲まれていたようです。今あらためて振り返ってみると、これまで私は、「看板に偽りなし」と示すこと、そして「看板にぶら下がらない」ことを潜在的に願いつつ生きてきた、と言えるかもしれません。さて当人はと言えば、齢を重ねて「喜」を迎え、もはやその「看板」に何と書かれているかは各方面にも周知のところだと思います。ところが、どうもこのところ、日がな水と

戯れたり絵筆を握ったりして、よもや新たな看板を掲げようと企んでいる…？まだまだ息子はのんびりと「喜」んでいる場合ではないようです。

【略歴】桐蔭学園中・高↓筑波大学体育専門学群
↓筑波大学大学院体育研究科修了

「写真」本人・5人家族・八ヶ岳仕事部屋

工学院大学助手↓講師↓宮崎大学助教授↓日本大学准教授↓教授（文理学部体育学科）
博士（教育学）、専攻はスポーツ教育学

おわりに

この画集を作るに当たり何を目的とするか迷いに迷った、「中メー
ル」の内容で勝負するのか、それとも「下手な水彩画」でアピール
するのか。すなわち「文章」か「絵画」か。どちらをとっても所詮
素人の作品、文学作品でもなく、美術作品でもない。でも何か心に
残る記念になるものを残したい。そんな気持ちで作った作品として
見てもらえたら幸いである。

全ての作品が自分なりに心に残るものばかりであるが、50年と言
う時間、それはそれは色々の事があったが、自分なりに我を通して
人の迷惑も考えずまっしぐらに生きてきたような気がする。

一つ一つの作品にそれなりに強い思い出が残されているが、全て
がサッカー人生であり、その思い出を描きながら筆の上に表現した
作品もある。

今や人生90年・100年の時代になった。喜寿の記念としてこの
ような物を残すのは僥倖な感じもするが私は今が人生で一番充実し
ている時だと感じている。70歳を過ぎると突然年を感じてくる、75
歳を過ぎると体力の衰えを強く感じる。スキーをやれば直ぐ判る、
昨年まで制動が利いた足腰が今年は力が入らない、転んでしまう。
ボールを強く蹴れない。

悲観的なことを言うつもりはない。ゴルフでドライバーが飛ばな
くなったならそれなりに正確な寄せとパターで勝負は出来る。只動け
なくなったら駄目なので足腰は鍛えよう。そんな事も含めて描くた
めに歩くのは良い。絵の題材を探す時、最近海、山、よりも建物
に興味がある、いや好きな題材は古い建造物に落ち着いてきた。

生意気に「記念に残る画集」などと考えていたが出来上がったも
のは、絵手紙、絵日記、サッカーノートの抜粋程度の記録集になっ
てしまったが、うそ偽りのない、正直な子供のつづり方で、これで
良かったと自己満足するよりしかたがないと、己を慰めている。な
により多くの教え子達に感謝の気持ちを表すのが本当の気持ちだっ
たと思っている。

後何年生きられるか？次は「米寿」を目標にしよう・・・
誰の言葉か知らないが、こんな言葉が心に響く今日この頃
である

「ボケたらあかん」 その為によ

頭の洗濯 生きがいに 何か一つの趣味持って せいぜい

長生きしなはれや



2012・3月・新東京駅丸の内口完成予想図

10月には完成予定の「丸の内口」作品 NO1 のスタートが旧丸の内口だったので今年完成される、この作品を最後の「とり」
にしたいと思ったが未完成のため東京駅にスケッチに行き「完成予想図」を貰い描いたものである。



倉岡氏2012年賀状（ペトラ遺跡・ヨルダン・竹ペン・水彩）

広大な岩山と岩を刻んで造った壮麗な建物遺跡群。エル・ハズネ（宝物殿）が有名ですが、エド・ディル（神殿）も、岩
山を登り切った所にそそり立つ、高さ45m、幅50mは壯観。

編集後記

先生が湘南サッカーのホームページに毎月書いていた「中メール」、ある時から目覚めた「絵かき」、執筆依頼をされた方々からの原稿、それらをご自分なりにまとめ「喜寿の記念に本を出す」と、大きなクリップで止められたA4サイズ・84ページの束を渡されたのが6月中旬。当初は今まで2冊刊行した「記念誌」程度と考えていたのですが、先生の熱意と本の内容が素晴らしく、それに負けないようにと41回生植松君と相談、プロの編集デザイナーの力を借りることにし、それなりの本を作れたと自負しています。

中さんとはOB会の発足(昭55年)以後いろいろな場面でお世話になったり、お世話したり?してきましたが、「先生」という職業は、優秀な教え子を持つと、いつまでも「先生」でいられるのだなーと思う昨今です。

先生は常々「死んでからの香典は要らない、死ぬ前に欲しい」とおっしゃっています。本の出版

記念に皆様から「生前香典?」を集め、なにかやりたいものです。

相羽克治(41回生)

この絵本の「誘い水」は相羽克治、植松二郎両君であった。二人に煽てられ、勘違いを起こしてこのような「絵本」を出す事になり、いささか反省しきりではある。

しかし「人の煽てには乗りなさい」という死んだ親父の遺言もあり、恥を忍んで書いてみたが内心「まあまあ」だと思って自己満足している。普通教え子と言つ者は「師の影を踏まず」と言つて「黒子」に徹して蔭でサポートするものだが、彼らは師を利用して表に出て何かを企てる心配があるので、いつも目を光らせている。

次は「米寿」でどんな恥を描くのか楽しみにしている。色々有り難う。

鈴木中

中さんの絵本—— cyu's mail/gallery

2012年 11月1日 初版第1刷発行

著者 鈴木 中
発行 神奈川県立湘南高校サッカー部 OB
編集人 相羽克治(湘南サッカー OB)

制作協力/(有)柳原デザイン室
印刷・製本/(株)佐藤印刷所

乱丁・落丁はお取り替えいたします
無断複製禁示

© Tadashi Suzuki. 2012 Printed in Japan



